

◆各話へのクイックリンク

※設定資料を飛ばして、本編を読まれる方は、クイックリンクを使って飛ばすことができます。

□第五話

□第六話

□第七話

□第八話

□第九話

□第十話

Copyright@2026 D³S

設定資料

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

～後編～

夢雄
美侶

Copyright © 2026 D³S

設定資料

タイトル

全体あらすじ

シリーズ構成

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

※前編 第一話 から 第四話 まで

※後編 第五話 から 第十話 まで

いよいよクリスマスシーズン。

しかしクリスマスプレゼントをかうお金がない小村は、怪しい店でバイトを始めます。そして、無事お金を貯めて、いざクリスマス。でも、シャイな小村君は？そして、智美の意外な過去。筋肉脳の滝本の淡い恋物語。今回は、シリアスな場面も多く、エロ、エロ、シリアス。やっぱりエロが多かった。

主要メンバーのクリスマスの過ごし方を堪能、煩惱、エロ脳、もうNO！で、お楽しみください。

・「私が工業高校に進学した理由 一学期」

・「私が工業高校に進学した理由 二学期」

・前編 第一話から第四話まで

★本作

・後編 第五話から第十話まで

全話共通設定

- ・クリスマス特別編（短編）
- ・「私が工業高校に進学した理由 三学期」

□第〇幕 サブタイトル

○場所

▽ト書き

※全話を通しての設定です

主要登場人物

◎メインキャスト

夢前 美優（ゆめさき みう）（十五歳）

高校一年生、（増本中学校出身）

成績は普通

ブラスバンド部に「入っており、中学では、

高校ではクラリネットを担当している

人前ではウヴな振りをしているが、内面は超エロエロ

ひとつ ひとよりエロが好き

ふたつ ふふふ とスケベ心
みつつ 見たくてたまらない

高谷 智美（たかたに ともみ）（十五歳）

高校一年生

野球部マネージャー

三人の中では背も高くおしゃれ

みんなの前では経験済みの振りをしているが、実は経験無し
中学時代は、虐められていた

※智美の過去は二学期編で明かされる

中川 松子（なかがわ まつこ）（十五歳）

高校一年生（辺富中学校出身）

吉賀に恋する乙女

成績優秀

大学へ進学するためにカメラ屋でバイトをしている
同じ中学校の出身に小島がいる

小村 健一（こむら けんいち）（十五歳）

高校一年生（増本中学校出身）

イケメンで、女子にもてる要素をもちながらも、すごく純粋で
世間知らずなところあり。

吉賀 達郎（よしが たつお）（十五歳）

高校一年生

身長 160センチ 体重48キロ 華奢で色白

カリブ海に浮かぶ小国の外交官の息子

海外生活のため、露出など気にならない性格

小村のことが好きである

松村 純（まつむら じゅん）（十五歳）

高校一年生

身長161センチ 体重52キロ

普段は黒縁メガネをかけている

水泳部に所属している

根暗で温和しい性格

実は、服を脱ぐと、見事な筋肉質の肉体を持ち、ボクシング、空手、

などを会得し 喧嘩はかなり強い

※松村の過去は第三部で判明

（補足） 家族構成

■夢前家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅
美優、美穂の部屋が二階にある

父 (現時点・無名)

普通のサラリーマン40代

コンピュータ関係の仕事をしており、ITに長けている

母 (現時点・無名)

姉 美穂(みほ) 美優の二歳年上(十七歳)

秀才で成績は常にトップ

※中学までは、それほど成績はよくなく、中学のある出会いから
猛勉強し超難関国立大学に自宅から通っている

そのためか おしゃれに疎くすっぴんで、服もシンプル

小村家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅

父 浩太郎(こうたろう)(四十四歳)

ごくごく普通の会社でサラリーマンをしている

しかし、裏では絶大な人気を誇るアダルト小説を書いており
稼いでいる。家族にはまったく知られていない。

母 (現時点・無名)

妹 明日美(こむら あすみ) 健一の二つ下(二四歳)

吉賀家

代々カリブ海に浮かぶ小国の外交官をしている

祖父 (現時点・無名)

父 (現時点・無名)

母 遥(はるか)

中川家

祖母 (現時点・無名)

日本海の海岸近くに住む

実は大地主

小島家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての木造建築

小島の部屋二階の和室

隣が姉(優子)の部屋

優子は、二年生で出演

○クラスメイト

★主要人物

☆準主要人物

出席番号

1 足立 (あだち)

2 井口 (いぐち)

バレーボール部
喧嘩ばやい正確をしている

3 池田 (いけだ)

サッカー部
小島の仲間

4 石井 益太 (いしい ぼんた)

通称 ボンソワール

5 岩山 (いわやま)

Copyright © 2026 D'S

6 遠藤

(えんどう)

7 太田

(おおた)

8 尾方

(おがた)

9 柿本

(かきもと)

10 桂川

(かつらがわ)

11 木高

(きだか)

☆

12 小島

智(こじまとも)

山岳部

二次元萌えキャラ大好き

好きな色は ピンク

しかし。二次元キャラに飽き足らず、カワイイ男の子

吉賀、松村のことも狙っている

姉(優子)がおり、美優の姉と同じ大学に通っている

★

13

小村

健一(こむらけんいち)

Copyright@2026 D's

バスケットボール部

14

塩屋

(しおや)

小島の仲間

15

柴山

(しばやま)

16

白石

(しらいし)

17

高石

(たかいし)

☆

18

滝本

恵(たきもと めぐみ)

ラグビー部

元々、美優、小村と同じ中学出身

がっちりした体格で、高校ではラグビー部に所属

二部の文化祭で、年上のAV女性に好意を持ち、

クリスマスに関係を持ってしまふ。

そしてAV女性が、小村の父親と知り合いであり、

滝本にはバレてしまふ

19

谷田

(たにだ)

クラスではイケメンボーイで もてる容姿をしている

いつも中林と連んでいる

20 津世 (つせ)

演芸同好会

21 手柄 (てがら)

22 豊崎 (とよさき)

23 中尾 (なかお)

バドミントン部

24 中谷 (なかたに)

25 中野 (なかの)

バスケットボール部

身長が高い

26 中林 (なかばやし)

27 中山 (なかやま)

★	★									
3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	
7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	
吉賀	松村	福山	福井	百部	広瀬	八木	野村	新田	永江	
達郎	純	俊雄	良樹	(ひやくべ)	(ひろせ)	(やぎ)	(のむら)	(にった)	(ながえ)	
(よしが	水泳部	山岳部	ラグビー部							
たつお)	(まつむらじゅん)	(ふくやまとしお)	(ふくい							
			よしき)							

バスケットボール部

★ 38 高谷 智美（たかたに ともみ）
野球部マネージャー

★ 39 中川 松子（なかがわ まつこ）

★ 40 夢前 美優（ゆめさき みう）
吹奏楽部 クラリネット担当

○教師

竹田（たけだ） 50代

クラスの担任で、てっぺんハゲがあることから、入学早々からザビエルとあだ名を付けられる
見た目と違い、生徒思いの良い先生である

☆ 土呂（とろ） 40代

保健体育担当

ゲイであり、男子生徒の股間を触るのが生きがい

落合（おちあい） 男 五十代

工業化学科の教員

山田（やまだ）女 四十代
工業化学科の教員

○その他（出数は少ないが、物語上 重要な役）

白井 幸子（しらい さちこ）
智美 中学時代のクラスメートで、智美を虐めていた

背景

学校（主舞台）について

姫磨工業高等学校（ひめまろこうぎょうこうつうがっこう）

美優達に通う高校

県立高校であり

- 一組・デザイン科
- 二組・工業化学科
- 三組・電気科
- 四組・機械科
- 五組・溶接科

六組・情報処理科

で構成される。

各科ごとに校舎がわかれており、敷地はかなり広い
シャワー室を備えた部活棟があり、二十五メートルの屋外プールを備える

クラブ活動

男子生徒が大半を占めているため、女子はマネージャーとなることが多い
・吹奏楽部

県内一の実力があり数々の大会で優勝している

- ・バスケットボール部
- ・ラグビー部
- ・サッカー部
- ・テニス部
- ・バドミントン部
- ・山岳部
- ・野球部
- ・陸上部
- ・水泳部
- ・極真空手部
- ・Eスポーツ部
- ・鉄道同好会
- ・クイズ同好会

Copyright@2026 O'S

・演芸同好会

○夢前家

若松町

○小村家

○吉賀の住むタワーマンション

新增山（しんますやま レジデンス）
五十階建ての構想マンション 最上階に吉賀が住んでいる

Copyright@2026 D³S

目次

目次

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

設定資料

全体あらすじ

シリーズ構成

記号

全話共通設定

※全話を通しての設定です

主要登場人物

◎メインキャスト

(補足) 家族構成

○クラスメイト

○教師

○その他 (出数は少ないが、物語上 重要な役)

背景

学校 (主舞台) について

Copyright © 2026 D³S

2
3
3
3
4
4
4
4
4
6
9
14
15
15
15

クラブ活動	16
目次	18
第五話	25
サブタイトル「ファッションモデルの人生がはじまるよ」	26
あらすじ	26
登場人物（本話のみ）	26
□ 第一幕 ファッションモデル？	27
○（ある秋の朝）一年二組の教室	27
○（同）実習室	32
□ 第二幕 スタジオ撮影	39
○（次の土曜日）某スタジオの入口	39
○ 撮影場所	43
□ 第三幕 帰り道	54
○（夕方）街中 帰り道	54
第六話	58
サブタイトル「バイトをはじめよう」	59
あらすじ	59

登場人物（本話のみ）	59
□第一幕 バイトをするぞ	60
○（翌日の朝）一年二組の教室 休憩時間	60
○（同）美優の席	63
○（同）吉賀の席	64
○（翌日の朝）一年二組の教室	66
○（昼休み）学校の校舎の裏	68
□第二幕 バイトの面接	71
○（次の日曜日）バイト先があるとされるマンションの前	71
○エレベーターの中	73
○マンションの一室	74
○（隣の部屋）マッサージの練習場	80
○某マンションの部屋	87
□第三幕	93
○（数時間後）マンションの一室 待機場	93
□第四幕 # おっちゃん VS 吉賀 #	95
○シャワー室	102

○待機所.....116

小村 吉賀がソファーに座り話をしている.....116

□第五幕.....119

青年（古屋） VS 小村.....119

○待機部屋.....130

○小村と古屋の部屋.....130

○受付のあるマンションの部屋.....144

□第六幕 翌週.....147

○（翌週の土曜日）マンションの入口.....147

○（同）受付のあった部屋の前.....149

第七話.....151

サブタイトル 「クリスマス大作戦 滝本 & 小雪 編」.....152

本話について.....152

あらすじ.....152

登場人物（本話のみ）.....152

□第一幕 突然の再開.....153

○（クリスマスの数日前の夕方）道.....153

○ 小雪の住んでいるマンション	155
□ 第二幕 小雪の家でクリスマス	163
○ (同) バスルーム	166
第八話	170
サブタイトル 「クリスマス大作戦 美優 & 小村 編」	171
あらすじ	171
登場人物 (本話のみ)	171
□ 第一幕 小村からの誘い	172
○ (クリスマスイブ) 二年二組の教室	172
○ (夕方) 美優の家のリビング	176
□ 第二幕 街中	178
○ (次の日のクリスマス) 昼間の駅前	178
□ 第三幕 映画館	180
○ 映画館の座席	180
□ 第四幕 帰り道	186
○ (夜) 街を歩く美優と小村	186
○ 美優の家の近くの公園	187

第九話

サブタイトル 「クリスマス大作戦 松子 & 吉賀 編」

あらすじ

登場人物（本話のみ）

□第一幕 性なるクリスマス

○（クリスマスの昼） 吉賀の家

□第二幕 先週の出来事

（# 回想 # 先週の昼）

○（先週の日曜日の昼） 吉賀の家

（# 回想 # 終わり）

□第三幕 松子も触発？

○（同）リビング

○（夕方） 吉賀家のマンションの前

第十話

サブタイトル 「クリスマス大作戦 智美 & 松村 編」

あらすじ

登場人物（本話のみ）

192

193

193

193

194

194

201

201

201

208

209

209

211

214

215

215

215

□ 第一幕 神聖なるクリスマス	216
○ (夕方) 商店街 クリスマスの飾りで華やかだ	216
← # インサート # ← 女に言われているところ	221
→ # インサート # →	221
○ ラブホ街	222
○ ラブホのロビー	224
○ ラブホの部屋	225
○ ラブホのシャワールーム	229
○ ラブホの部屋	229
○ (夜) 繁華街の道	238
おわり	243

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第五話

夢雄
美侶

サブタイトル「ファッションモデルの人生がはじまるよ」

あらすじ

小村は吉賀の誘いで、服飾のカタログ用のモデルをすることとなる。

その服飾とは、一度、小村がイカされちゃ 例のマヌカン

さて、今回は どんなことをされるのやら

登場人物（本話のみ）

Copyright@2020 D'S

□ 第一幕 ファッションモデル？

さあて、文化祭も終わり、次のイベントは？

○（ある秋の朝）一年二組の教室

▽ 美優 智美 松子 美優の席の周りで話をしている

「なんも無いぞお〜」

「いきなり どうしたの」

「文化祭も終わって、正月まで何もすることないのよ」

「何言ってるの。クリスマスっていうビッグイベントがあるじゃない」

▽ 吉賀 自席に座っている

女子の声が聞こえ、後ろを向く

▽ 吉賀 指を立て指を振りながら

「ちっ、ちっ、ちっ、それは違うな」

美優

智美

美優

智美

吉賀

松子

「吉賀君、どうして」

吉賀

「夢前さんにクリスマスというのは無縁だからだよ」

松子

「あら、美優って 仏教だったかしら」

吉賀

「そうじゃないよ。クリスマスとは、恋人同士が一緒に過ごす時間。夢前さんには、一番、縁のない話じゃないか」

美優

「ちょっと吉賀、どういうこと。クリスマスって言ったら、ケーキでしょ、チキンでしょ、それに、それに、なんたって、食べるものが沢山あるのよ」

智美

「美優、そんなにムキにならないで」

吉賀

「ね。クリスマスに、縁が無さそうでしょ」

美優

「よしがい」

▽小村 吉賀を実習棟に行くのに誘いにくる

小村

「おーい 吉賀、そろそろ実習室に行こうぜ」

吉賀

「うん。行こう、行こう」

▽小村 夢前の顔を見て、吉賀の顔を見る

小村

「吉賀、また夢前に撮られてたのか」

吉賀

「ううん。夢前さんは、クリスマスに縁がないよねって話してただけなの」

美優

「ちょっと小村君、聞いてくれる、吉賀君 ひどいのよ。私にはクリスマスは関係ないって」

小村

「そっかな。俺は、案外、似合っそうに見えるけどな」

▽美優 胸を張る

美優

「やっぱり小村君は、ちゃんと判ってる。その辺のちんちくりんと違うわ」

▽吉賀 小村に抱きつき、小村の顔を見上げる

吉賀

「えーん。小村君、夢前さんが、僕のこと ちんちくりんって言う」

(美優)

(ちょっと、小村君に抱きつくのは、私よ)

▽小村 吉賀の頭をなでる

小村

「よしよし。良い子だ、良い子だ」

▽吉賀 美優の顔を見て、ウィンク

(美優)

(あの やろお)

吉賀

「うんうん。僕、怖かったよ」

▽吉賀 小村の股間を撫でる

(美優)

(ちょっと、こいつ 何してんの。それも、私がしたいのに)

小村

「こら、吉賀 どなくさに紛れてどこ触ってる」

▽吉賀 小村の股間部分から手をどけ、顔を上げる

吉賀

「ばれたか」

小村

「そりゃそうだろ」

小村

「ほら、実習棟に行こうぜ」

▽小村 美優の方を向く

小村

「ほんならな、夢前」

吉賀

「ガンバ、夢前さん」

▽小村 吉賀 教室から出ていく

美優

「あのやろー後で、怨念を飛ばしてやる」

智美

「あんたは、霊能力者か」

松子

「まあまあ美優、おさえて、おさえて。私たちも実習棟に移動しないと」

美優

「次は 落合の実習かあ。ラッキー」

松子

「あら、美優って、落合のこと好きだったけ？」

美優

「ちやうちやう、実習だと眠くならないの。私って、一カ所に停まってしまうと、死んじゃうのよ」

智美

「あんたはサメかよ」

松子

「まあ、美優は、数学の藤本の時は、ナマケモノのように寝てるもんね」

松子

「そんなことより、さあ、急ぎましょ」

美優

「だね」

▽美優 智美 松子 教室から出ていく

(数分後)

○(同) 実習室

▽小村 吉賀の目の前の松子の席に座って 吉賀と話をしている

▽松子 少し遅れてやってくる

小村が座っているの、吉賀の横に立つ

松子

▽智美 吉賀の反対側の椅子に座る
▽美優 智美の横の椅子に座る
「ねね、私の椅子に座ってなんの話してるの？」

小村

「中川 悪い悪い、すぐにどくよ」

松子

「いいわよ。ところで なんの話してたの？」

美優

「なににに、小村君の恋ばな」

(美優)

(しまった、余計なことを言ってしまった)

小村

「違う、違う」

吉賀

「あのね、夏にみんなで、松子ちゃんのおばあちゃんの家に行ったでしょ」

松子

「うんうん、それで」

吉賀

「その時に、僕ら水着を買ったでしょ」

(美優)

(小村君は、精液ぶちまけて、もらってきたんだっけ)

吉賀

「その店から、来年の新作水着のモデルになってくれない？って話があったんだ」

松子

「モデル？」

吉賀

「来年の出す予定の水着を試着して写真を撮るの。で、百貨店とかに配って反応をみるんだよ」

美優

「まだ冬だよ」

智美

「ちちち、美優は知らないんだな。ファッションの世界って半年なんか遅いくらいよ」

美優

「そうなんだ」

松子

「すごい、モデルだなんて」

吉賀

「店にだけ出回るカタログなんで、普通の人には目に付かないんだけどね」

松子

「それでも すごいわよ。で、小村君が選ばれたのね」

小村

「俺、モデルって柄じゃないし」

吉賀

「そんな事ないよ。スタイルだっていいし」

小村

「もっと、男前は、いるだろ」

吉賀

「めちやくちや男前が着ている服ってほしい？小村君のような、どこにでもいるちよっと男前の方が着ているほうが、売れるんだよ」

松子

「小村君って、すっごく今風で、かっこいいと思うけど」

智美

「そうよ、小村君って顔が小さくて、十分男前よ」

小村

「高谷さん、おだてないでよ」

松子

「あ、でも小村君だけ？ 吉賀君は、しないの？」

吉賀

「僕？ 僕もするよ。Sサイズの美少年モデルで」

(美優)

(美少年は余計じゃ。服はSサイズでも、中身はLなんだよな)

吉賀

「実際の売り場での宣伝だから、より一般人に近い人がいいからね。外人さんモデルに似合っても、僕ら一般人には、似合うとは限らないから」

(美優)

松子

(いや、あんたは十分 日本人離れしてるって)
「そっか、服のサイズに合わせて必要なんだね」

智美

「へえ、二人ですごいわね」

松子

「ねね、小村君、いいんじゃない？」

吉賀

「そそ、バイト代、プラス 試着した水着は、全部くれるって」

美優

「いいなあ」

智美

「じゃ、美優も出れば？」

小村

「夢前なら、上がないから、男物でもいけるやろ」

美優

「小村君、あとで、校舎の裏で、待ってるわね」

小村

「夢前が言っと、冗談が本気に聞こえるんだよな」

松子

「ところで、水着を買った店って、アノ 男好き店長のとこよね」

吉賀

「そっだよ」

美優

「ええ、危険よ キケン。今度こそ 小村君は、ああされて、こう されて」

智美

「美優たら、何を想像してんのよ。松子も、言ってやりなよ」

松子

「えっと、吉賀君が、ああされて、こうされて、出されて、イヤっ！」

智美

「二人ともっ」

吉賀

「大丈夫だって、僕もいるんだし」

(美優)

(それが、一番危ないって。最近、私が、こいつの小村君への熱い視線に気づいていないと思ってるのか。こいつと、店長で、小村君に薬で眠らせて二人で、むひひひひなことするんじゃない・・・)

松子

「美優、顔がにやけてるよ」

美優

「いかん、いかん 私としたことが」

松子

「私、吉賀君が心配だから、付いていっていい」

美優

(美優)

吉賀

松子

「松子が行くなら、私も着いて行く」

(小村君が 店長にレイプされていると「見たい」)

「いいよ。そんなに心配なら、おいでよ」

「じゃ、決まりね」

Copyright@2026 D's

□第二幕 スタジオ撮影

○（次の土曜日）某スタジオの入口

美優は松子と車で待ち合わせをし、吉賀に教えてもらったスタジオを訪問

「ここね」

「ここよ」

「いざ」

（小村君のレイプを見に）

「いざ」

（吉賀君のもっこり眺めに）

▽美優、松子 ビル入口の自動ドアの前に立つ
自動ドアが開く

▽美優 松子 中に入る

美優

松子

美優

（美優）

松子

（松子）

松子

「スタジオって言うから、テレビ局みたいなの想像してたけど、七五三の写真撮るのと変わらないわね」

美優

「そうね。私、芸能人とか、居たらどうしよう？　なんて、考えてたけど、普通なのね」

▽美優　持っていた鞆を手でおさえる

(美優)

(色紙が無駄になったじゃないの)

○スタジオ一階の受付

受付嬢が一人で座っている

▽美優　松子　受付嬢に話しかける

「えっと、ダイジルの撮影見学者なんですが」

受付

「ダ、ダイジルですか？」

美優

「はい、大汁(だいじる)じゃないですよ」

松子

「美優、違うわよ。ディーゼルよ」

受付

「ああ、ディーゼルですね。お名前は？」

松子

「中川と夢前です」

受付

「少々お待ちください」

▽受付のお姉さん。パソコンの画面で確認

受付

「はい、伺っております、こちらの名札を首から下げていただき、

エレベーターで、三階の Aスタジオにお入り下さい」

松子

「ありがとうございます」

▽松子。受付嬢から名札を受けとる

▽松子。美優。エレベーターの方に向かう

○エレベーターの中

▽美優。松子。エレベーターの表示板を見ている

松子

「智美も来たら良かったのにね」

美優

「なんか、今日は、デートって言ってたわよ。あいかわらず、お盛んなのよ」

松子

「お盛んって、美優、最近 最近変なテレビとか見てない」

美優

「見てない、見てない」

松子

「ドキドキするわね」

美優

「私たちも スカウトされたりして」

松子

「美人三姉妹で売れるわよ」

○スタジオビルの3階

エレベーターの扉が開く

▽美優

松子 エレベーターを降り 廊下を歩く

○スタジオAの入口

松子

▽松子 スタジオの表示を見る

「ここのようね」

○撮影場所

▽美優 松子 スタジオに入っていく

遠くに眩しい明かりが見え、数人が集まっている

・カメラマン（男）

・カメラマンの助手（女A）

・ライト係（男）

・レフ板持ち（女B）

・メイク（女C）

▽小村 吉賀 砂浜の壁紙をバックに、小村と吉賀が、

水着姿で、立っていた。

▽小村 吉賀 カメラマンの指示に従ってポーズをしている

「はい、小村君、こっちに目線。吉賀君は、上目遣いで、小村君の方みて」

カメラマン

カメラマン

「いいよ。いいよ」

カメラマン

▽カメラマン シャッターを切っている

「はい、オッケー。次の撮影開始まで、十分休憩だ。それまでに、次のに着替えておいて」

▽小村 吉賀は、撮影舞台から下りる

「ごくろうさま。二人とも素敵よ」

「ありがとうございます」

「吉賀君は、ぜんぜん素人じゃないわね。プロのモデルみたいだったわ」

吉賀 「そうですか。素質があるのかな」

店長 「あるある。小村君は、シャイなところが、仕草に出ている、それもいいの」

小村 「それは、いいのか 悪いのか」

店長 「いいに、決まってるじゃない。そうだ、今度、家にいらっしやいよ
私が、手取り足取り、教えてあげる。ついでに、真ん中の足もね」

美優

「いいえ、行きません」

▽店長 後ろを向く

美優と松子が立っているのを見る

店長

「あなた、誰？」

美優

「わたし、わたしは、通りすがりのモデルよ」

▽店長 まさか？って顔をする

小村

「すみません。僕達の友だちなんです。僕たちの撮影してるところを見たって言うので」

店長

「まっ、そうなの。まさか、健ちゃん、この女と やったの？」

(美優)

(健ちゃん、なんて、馴れ馴れしく呼ぶんじゃないねえ)

小村

「いえ、クラスメート、ただの友達です」

店長

「そう、良かった。私の健ちゃん穴は私のものだけよ」

(美優)

(この、ホモ 頭おかしいんとちゃうか?)

▽店長 松子を見る

「こちらの方は」

店長

松子

「わ、私ですか?」

吉賀

「僕の彼女です」

▽松子 顔が赤くなる

▽松子、美優 吉賀を見る

松子

「吉賀君たら いきなり何を言うの」

店長

「あ、そう。とつても、カワイイカップルね。がんばってね」

(店長)

(なに、この女 ビッチじゃないの)

松子

「はい、ありがとうございます」

社員

「社長、そろそろ二人 着替えに入ってもらわないと終わりませんよ」

松子

「社長？」

店長

「あら、知らなかった？ 私、ダイジル日本支社の社長をやらせてもらってるの」

吉賀

「店長、ダイジルって」

店長

「さっき、受付から、ダイジルって言う、うるさいハエが二匹飛んで行ったって連絡あったのよ」

▽松子 店長を睨みつける

▽美優 店長を睨みつける

(三人の間に火花がはしる)

▽店長 吉賀、小村の方を向く

店長

「さあ、お二人さん、撮影の続きよ。行きましょ。

今度も、私が 着せてあげるわ。ちゃんと いいチンポジに収めてあげないとね」

吉賀

「はい」

▽社長 吉賀と小村の間に入り、スタジオから出ていく

店長

「さあ、小村君、今度は、もっと股間を強調させてもらおうわよ」

○スタジオ

▽美優 松子 スタジオを見回す。

美優

「なんだかんだ、スタジオなんだわ」

松子

「そうよ、スタジオよ」

(数分後)

○スタジオ

▽小村 吉賀が 競泳水着姿でスタジオに戻ってくる

▽美優 小村、吉賀の股間部分を見比べる

(美優)

(やっぱり、吉賀の方が おおきいのか)

▽松子 吉賀の股間を見る

(松子)

(吉賀君のあそこ、また触ってみたい)

○セットの中

カメラマン

「じゃ、撮影しようか」

▽小村 吉賀、セットの中に入る

カメラマン

「ちょっと、好きなポーズをやってみて」

▽吉賀 座ったり、手を後ろに組んだり、慣れた感じでポーズを決めていく

▽小村 吉賀のを見ながら 不慣れな感じでポーズをしていく

○セットから離れた場所

松子、美優が見ている

松子

「さすが、吉賀君ね。慣れてるわ」

美優

「だよな。まさにアイドルだよね」

松子

「美優たら」

○セットの中

カメラマン

「ちょっと、二人抱き合ってくれない」

▽小村 戸惑っている

▽吉賀 小村を両手で抱きつく

(美優)

(あのカメラマン なんちゆう、要求を出すんだ)

吉賀

「小村君も、僕のように手を回して」

小村

「ごうか」

▽小村 吉賀に両腕を回し 抱きつく

カメラマン

▽吉賀 さらに力を込めて 抱きつく

「いいよ。いいよ。そのまま」

▽カメラマン 二人の股間の部分のアップ写真を取り出す

(女優)

(あの写真、欲しい)

カメラマン

「もっと、股間をくっつけたいな。もう少し、大きくしてくれる」

▽小村 戸惑う

カメラマン

「しょうがないな。メイク ちょっと、大きくしてあげて」

メイク係

「はい」

▽メイク係 小村の側にくる

メイク係

「ちょっと 失礼するわよ」

▽メイク係 小村の競泳パンツの中に手を入れて、陰茎を扱きだす

小村

「ちょっと、何するんですか」

カメラマン

「いいから、黙って 撮影に必要なことなんだから」

○セットの外

松子

「え、あの人、小村君になにしてるの」

(美優)

(いいなあ。公然とできるのね。私もメイク係になりたいわ)

○セットの中

▽メイク係 小村の競泳水着から手を出す

メイク係

「これくらいで、どうですか」

カメラマン

「もうちょっと、ほしいな。あと、上向きにしてくれ」

メイク係

「わかりました」

▽メイク係 小村の競泳水着の中に手を入れ、陰茎を上向きにする

小村

▽メイク係 小村の競泳水着から手を出すと、競泳水着の上から、陰茎を扱きだ

「あ、あ、だめ、出そう」

メイク係

「もう少し我慢して」

▽メイク係 扱き続ける

小村

「や、やばい、射精する、する。うっ」

▽小村 腰を曲げ手で股間を押さえる

メイク係

「すいません。中断です」

カメラマン

「もう一回休憩」

(数時間後)

□ 第三幕 帰り道

○ (夕方) 街中 帰り道

美優と小村、歩いている

大分前を 松子と吉賀が歩いている

美優

「今日は楽しかったわ」

(美優)

(遠かったけど 小村君のいくとこ見れて)

小村

「俺も、良い経験できたよ」

(美優)

(あんな、ところで いかされるって 良い経験だよ)

美優

「うんうん。小村君 かつこよかったわ」

小村

「そうかな」

(美優)

(競。パンのもっこりが、一番似合ってるわね)

○ クリスマスソングが聞こえてくる

小村

「そういえば、もうすぐ クリスマスだね」

美優

「そうね」

小村

「夢前は、まだ、サンタクロース信じてたりして」

美優

「そうね、小五までは、信じてたわ」

小村

「おれ、小六」

美優

「ウンでしょ」

小村

「めっちゃマジ」

美優

「小村君で、純情だったんだ」

(美優)

(今でも、純情なんだよな)

小村

「なあ、夢前、クリスマスプレゼントもらうなら、何がいい？」

美優

「最新型のバイブ」

小村

「え？ バイブ？」

美優

（ヤバイ、無意識で、言っちゃった。どうしよう、どうしよう）
ちようど、その時、アクセサリショップの前を通っていた。
美優は、とっさに、ショーウィンドーの中を指を指す）

美優

「ちがう、ちがう、ピアス。パイプオルガンの形をした」

小村

「パイプオルガンのピアスって、すごいな」

（美優）

（なんとかセーフのようね）

小村

「ピアスって、耳の穴を空けるやつ？」

美優

「そう」

小村

「高校生が、そんなこと、しちゃダメだよ」

美優

「そう？ 智美なんか、いっぱいもってるって言ってるわよ」

小村

「だめだめ、体に 穴を開けるなんて、俺が許さないから」

美優

小村

「なんで、小村くんの、許しがいるの？」

「いや、それは・・・」

▽小村 吉賀、美優と小村が来るのを待っている

▽美優 小村、松子と吉賀のところに追いつく

「美優達、歩くの遅いよ」

「ごめん」

「悪い」

松子

美優

小村

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第六話

夢雄
美侶

サブタイトル 「バイトをはじめよう」

あらすじ

小村は美優にクリスマスプレゼントをするためにバイトをはじめます
しかし、そんな短期で高額なバイトはあるのでしょうか？
イケメンの小村がバイトに選んだのは？

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□ 第一幕 バイトをするぞ

○ (翌日の朝) 一年二組の教室 休憩時間

▽ 小村 自席に座っている

▽ 吉賀 小村の席にやってくる

「困った、困った」

「小村君、何を困ってるの」

「もうすぐ、クリスマスだろ」

「そうだね」

「夢前に、クリスマスプレゼントをげようと思って、さしげなくに聞いてみたんだ」

「そしたら?」

「なんて言ったと思う」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

「そうだね。女の子だったら、マフラーとかかな」

小村

「マフラーだったら、いいよ」

吉賀

「違うの」

小村

「なんとピアスが、欲しいんだって」

吉賀

「へえ 意外、夢前さんに、そんな女らしさが、あったなんて。でも、それで何か問題なの？」

小村

「知ってるか？ピアスって、耳に穴 空けるんだよ」

吉賀

「それぐらい知ってるよ」

小村

「体に、穴を、空けるなんて、信じられない」

吉賀

「そうじゃないと、付けられないからね」

小村

「なんと、その穴に、細いものを入れる。おおー怖い」

吉賀

「女って、空いた穴に、棒を入れるのが好きな生き物なんだよ」

小村

「今、なんて」

吉賀

「ごめん、小村君には、難しかったね。
まあ、今時、ピアスなんかしてる子いっぱいいるよ」

小村

「そりゃ、大人になったらいけど、俺ら高校生だぜ」

吉賀

「小村君、古いよ。だって、ほら、僕だって」

▽吉賀 自分の耳たぶを小村に見せる

そこには 小さな穴が空いている

▽小村 吉賀の耳たぶをじっと見る

「吉賀あお前ってやつは、大切な体になんてことしてるんだ」

吉賀

「何いつているの。今時の高校生ってピアスぐらいするよ」

小村

「知らなかった。黒い点があることは知ってたけど、ホクロだと思ってた」

▽小村 美優の方に走っていく。

○(同) 美優の席

▽美優、松子、智美 やべっている

▽美優 小村が急いでやってくるのを見る

「小村君、どうしたの」

「な、な、吉賀って、ピアスしてるの知ってた」

「吉賀君のピアス、知ってるわよ。さすがに学校では見たことないけど、

空いてるから、してるんだろなって」

「そんなの、入学式の時から知ってるわよね。美優も、知ってたでしょ」

▽美優 知らなかったけど知ってたふり

「ええ、もち、もちろんよ」

(うわっ、ホクロだと、思ってたよ)

(美優)

美優

智美

松子

小村

美優

小村

「ちつ、教えてくれよ」

智美

「別に、教える情報でもないわよ」

小村

「そっか、知らなかったのは、俺だけだったのか」

▽小村 吉賀のところに戻る

○(同) 吉賀の席

小村

「夢前たちは、知ってたって」

吉賀

「大抵の人は気づくんじゃないかな」

小村

「え、俺が鈍感なのか」

吉賀

「そんなことより、小村君、何が、困ってたの？」

小村

「そうだった。夢前に、クリスマスプレゼントしたいんだよな。
で、さり気なく聞いてみたら、ピアスって言うんだ。
それで、調べてみたら、結婚、高いんだよな」

吉賀

「いま、持っている お金で買える物にすれば いいじゃん」

小村

「それじゃ、いいものが買えないんだよ。ガラス玉や、メッキなんて、嫌なんだよ。俺は、本物指向なんだよ」

吉賀

「小村君って、変なとこにこだわるよね」

小村

「それが、俺のいいところなのさ」

吉賀

「で、どうしようと思ってるの」

小村

「そうなんだよ。どうしたらいいか一緒に考えてくれよ」

吉賀

「手っ取り早く、バイトをすれば」

小村

「バイトか。そうだな、バイトでも探すか。でも、そんな簡単に見つかるかな」

吉賀

「今は、どこでも人手不足で、沢山あるはずだよ」

小村

「でも、バイトの給料って、もらえるの1ヶ月くらい先になるんだよね」

吉賀

「そうだよ」

小村

「じゃ、クリスマスまでに間に合わないかもしれないな」

吉賀

「それなら、僕と援交する？三万円払うけど どう？」

小村

「のし付けて断るよ」

吉賀

「うん、僕もイヤだな。お金目当てのセックスなんて、できないからね」

小村

「なんか、違うことになってない」

吉賀

「気にしない、気にしない」

○（翌日の朝） 一年二組の教室

▽小村 教室に入ってきて、吉賀を見つける

▽小村 吉賀の席にやってくる

「吉賀あ。いいバイト見つかりそうだよ」

吉賀

「え？ もう？」

小村

「ほら、コレ見てみるよ」

▽小村 パソコンから印刷したと思われるものを吉賀に見せる

短期アルバイト募集

簡単なお仕事です。

日払い、日給 一万円 + 歩合

お仕事で疲れた、お客様に、マッサージをして癒やしてあげる、
ボランティア精神あふれるお仕事です。

マッサージ経験は、なくても大丈夫

お問合せ XXXX-XXXX-XXXX

小村

「どうだい？ いいだろ。これなら、一日だけで、十分じゃないかな」

吉賀

「これって怪しくない」

小村

「どこが 怪しいんだ」

吉賀

「どっちかと言うと 怪しさしかないんだけど」

小村

「取りあえず、昼休みに連絡だけしてみるよ」

○（昼休み）学校の校舎の裏

▽小村 吉賀がいる

小村

「よし、かけてみるよ」

吉賀

「えっと、携帯の番号は、非通知でかけてね」

小村

「おっけー」

▽小村 スマートフォンを取りだし 電話をかける

小村

「はい。バイト募集を見て」

小村

「はい。面接ですか」

小村

「わかりました」

小村

「では、次の日曜日」

▽小村 電話を切る

吉賀

「なんて」

小村

「面接が必要なんだって」

吉賀

「面接か。そりゃそうだよね」

小村

「俺、バイトなんてしたことないから、心配だよ」

吉賀

「ちょっと待って」

▽吉賀 スマートフォンを取りだし電話をかける

吉賀

「はい、そうです」

吉賀

「では、日曜日に」

吉賀

吉賀

吉賀

「はい。お伺いします」

「それでは」

▽吉賀 電話を切る

「僕も、一緒に行ってあげるよ」

Copyright@2026 D³S

□第二幕 バイトの面接

○（次の日曜日）バイト先があるとされるマンションの前

▽吉賀 小村 マンションの前で立っている

「ここだよな」

「そうみたいだよ」

「おれ、会社の様などころをイメージしていたけど、ここって普通のマンションだよな」

「そうだね。僕は、なんとなく判ってたんだけどね」

「とりあえず、行ってみないことには 始まらないよな」

「そうだね」

○マンションの一階ロビー オートロックになっている

「押すぞ」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

▽小村 インターフォンのボタンを押す

、ピンポーン、

(直ぐに)

▽インターフォンから若い男の音がする

「はい」

「バイトの募集で来た小村です」

「吉賀です」

「バイトの面接だね」

「はい」

「もう一人の子の顔が見えないな。カメラの側に寄ってきてくれる」

▽吉賀 インターフォンのカメラの前に立つ

男

小村

吉賀

男

小村

男

男

「今、開けますね」

▽マンションの扉が開く

▽吉賀 小村 マンションに入っていく

▽吉賀 小村 マンションのエレベーターに乗る

○エレベーターの中

小村、吉賀が乗っている

「なんで、吉賀の確認をしたのかな」

「案外、顔を確認してたんじゃない」

「なんで、顔を」

「イケメンかどうか」

▽エレベーターが止まる

吉賀

小村

吉賀

小村

▽小村、吉賀 エレベーターから降りる

○(同) 指定された部屋の前

▽小村 扉をノックする

扉が開く中から若い男が出てくる

「いらっしやい。さあ、どうぞ」

「おじやまします」

▽小村 吉賀 男について、マンションの部屋に入っていく

○マンションの一室

2「DKKのマンションで、テーブルとソファがある

「さあ 座って」

▽小村 吉賀 ソファに座る

「どちらが 小村君で、吉賀君」

男

小村

男

男

▽小村 手を少し上げる

「あ、僕が小村です」

「背が高い方が小村君だね。じゃ、そっちが吉賀君ね」

「はい」

「小村君は、イケメンでスタイルがいいね。吉賀君は、童顔でカワイイよ
どっちも、採用だよ」

「え、アルバイトさせてもらえるんですか」

「ああ、君らのような子は、お客様も大喜びだよ」

「そういえば、仕事の内容って」

「そうだった。二人があんまりイケメンだから、忘れてたよ。
まずは、簡単に仕事内容を説明するね」

「サラリーマンの方が、お仕事で疲れた体を癒やに、ここに来られます。
君たちは、その方達を優しく癒やしてあげる仕事をしてもらいます」

小村

「癒やすってどうすんですか」

男

「一番簡単なのは、話を聞いてあげること。次にマッサージをしてあげるんだ」

小村

「僕ら、マッサージ経験ないんですけど」

男

「心配なくていいよ。この後 教えてあげるから。それに、マッサージを希望してくる人は、マッサージを目的としてない」

小村

「マッサージをしにきて、マッサージじゃないとは」

男

「まあ。その時が来ればわかるよ」

小村

「大丈夫ですか」

吉賀

「心配ばかりしていてもしょうがないよ」

男

「バイト料のことだけど、お客様一人つき、一万円

小村

「一万円か。じゃ、僕、二万円あればいいんです」

男

「それだけでいいの。じゃ、一日で稼げちゃうね」

小村

「やった。でも、失敗したりしないですか」

男

「大丈夫、大丈夫。お客様の言う通りにしていればいいよ。それに」

小村

「それに」

男

「お客様を喜ばせてあげると、お小遣いをくれるかもしれないよ」

小村

「バイト代までもらえて、お小遣いももらえるんですか」

男

「そうそう。良いバイトでしょ」

吉賀

「危険はないんですか」

男

「そうだよね。危険の心配するよね。でも、心配はない。危険を感じたら、部屋に備え付けのインターフォンを使って俺に連絡してくれる。」

それでもインターフォンができない状態のときは、

部屋にカメラがあって俺が監視しているから安心して。

君たちの危険を察知したら、すぐに助けに行くから」

吉賀

「じゃ、僕たちはずっと監視されているんですね」

男

「監視っていうと悪い言い方だけど、君たちの安全を考えてだからね」

吉賀

「そうなんですな」

男

「じゃ、早速だけど、今日からしてみるかい」

小村

「今日からですか」

男

「そう。二万円稼げたらいいんですよ。じゃ、今日で終わらせちゃいなよ」

小村

「吉賀、どうする」

吉賀

「小村君に任せるよ」

小村

「何も、準備してないしな」

男

「大丈夫。まだ、十時でしょ。二時間ほどレクチャーしてあげるから、午後からお客さんの相手してくれれば、夕方には終わるよ
それに、昼間のお客さんの方が、いろいろと安全なんだよ」

小村

「やっぱり危険ってことですか」

男

「ごめん、ごめん。夜だと、たまに酔っ払ってる人がくるの。そういった人は、常識が通じない時があるんだよ」

小村

「そうなんですね。じゃ、せっかく来たんだし、じゃ、今日だけということだ」

男

「うんうん。時間は大切にしなくちゃ」

▽男 吉賀の方を向く

男

「君は どうする」

吉賀

「もちろん、僕も、小村君につきあうよ」

男

「よし。じゃ、決まり。そしたら、今から マッサージの練習をしようか」

小村

「はい。よろしくお願いします。」

男

「じゃ、隣が実施部屋になってるから、こっちにきて」

▽男 立ち上がり、隣のへやに続くふすまを開ける

○（隣の部屋） マッサージの練習場

洋室になっており、真ん中にマットが敷いてある
角に冷蔵庫と、タンスが置いてある

▽男 部屋に入り、二人を招く

▽小村 吉賀 部屋に

「ちょっと部屋の造りは違うけど、キッチンに冷蔵庫があるから、
そこから飲み物を出してあげてくれる。

それと、タンスがあるので、ユニフォームを入れてあるよ。

ユニフォームは、お客様が指定されたものを着てくれたらいいよ
何も言われなかったら、Ｔシャツと短パンね」

「ユニフォームって、そんなに種類があるんですか」

「そうだね。お客様の要求を答えているうちに増えていったんだよ。
中には、お客様が持ち込んで、くることもあるから、その場合は、
できるだけ それを着てあげてね」

「はい。わかりました」

男

小村

男

小村

男

「取りあえず、ユニフォームに着替えようか。ダンスを開けてもらん」

▽小村 タンスの引き出しを開ける

綺麗に整頓された、体育会系のユニフォームが入っている

男

「そうだね。何を着てもらおうか。小村君は、部活は何やってるの」

小村

「僕も、吉賀もバスケットボールです」

男

「バスケか。ちょっと人気ないかな。取りあえず、今日は、競パンでいこうか」

小村

「競パンってなんですか」

男

「競泳用の水着のことを競パンって言うんだよ」

小村

「そっか、わかりました」

男

「じゃ、着替えてくれる」

▽小村 タンスの中から、競パンを二枚探しだし、一枚を吉賀に渡す

男

▽吉賀 小村から 競パンを受けとる
▽小村 吉賀 上に着ているものを脱ぐ
▽男 小村の上半身を見る

小村

「小村君は、めっちゃくちゃ良い体してるね。あ、吉賀くんだって、いい体だよ」
▽小村 吉賀 ズボンを脱ぎ、パンツを脱いで、競パンを穿く

男

「これでいいですか」

▽男 二人の姿を見る

吉賀

「吉賀君は、大きいね」

「結構、言われますね」

男

「そりゃいいや。二人とも、人気者になるよ」

小村

「でも、今日だけですから」

男

「そっか。まあ、風呂場に行こうか」

小村

「風呂場ですか」

男

「そう、まずは、お客様の体をシャワーで洗ってあげるんだよ」

小村

「なるほど」

▽男、小村 吉賀 風呂場に行く

男

「じゃ、二人で中に入って、洗いあつてみてくれる。そこにある、スポンジ、石鹸、シャンプーは自由に使っていていいよ」

小村

「はい」

▽小村 吉賀 中に入る

男は、脱衣場の場所で、二人を見ている

男

「そうそう、浴槽の中に入ってね。でないと掃除が大変だから」

小村

「わかりました」

小村

▽小村が先に浴槽に入り、吉賀が続く
「じゃ、俺が吉賀を洗うね」

吉賀

「うん。お願いする」

▽小村 シャワーを出す

吉賀

「冷たい」

▽小村 シャワーをさっと 吉賀から避ける

小村

「ごめんごめん」

男

「まずは、温度を確かめてくれるかい」

▽小村 シャワーの温度を調整する

小村

「これで どうだい」

吉賀

「うん。ちょうどいいよ」

男

「まずは、背中から」

▽吉賀 小村に背中を向ける

▽小村 吉賀にシャワを浴びせる

「そろそろ体を洗ってあげてくれるかい」

「はい」

▽小村 スポンジをとり、ボディソープを付ける

▽小村 吉賀の背中をスポンジで洗う

「やさしく、やさしくだよ。良い感じ」

「背中が終わったら前ね。上から始めて、足下まで」

「吉賀、今度は、前」

「うん」

吉賀

小村

男

男

小村

男

吉賀

男

吉賀

男

吉賀

男

▽吉賀 小村の方を向く

▽小村 吉賀の胸のあたりからスポンジで擦る

「あ、くすぐりたい」

「下半身は、念入りに」

▽小村 吉賀の競泳水着の上からスポンジを当てて擦る

吉賀の競泳水着が石鹼の泡まみれになる

「あう」

「どうした、吉賀君」

「いえ、なんにも」

「じゃ、石鹼を流して終わりかな」

▽小村 吉賀についた石鹼をシャワーで流した

(数分経過)

○某マンションの部屋

▽吉賀、小村 男が 洋室にいる

▽吉賀 小村は、バスタオルで、身体、競泳水着を拭いている

「大体わかったかな」

「はい」

「じゃ、次は、マッサージを試してみようか。今度は、吉賀君から」

「はい」

「じゃ、小村君はパンツを脱いで、マットの上に寝てくれるかい」

「全裸なんですか」

「そうだね。だいたい全裸になるかな。全裸が恥ずかしい人がいたら、この引き出しに紙パンツが入っているから出してあげてくれるかな」

男

▽男 引き出しから紙パンツを取り出して見せる

「じゃ、はじめようか。まずは、うつ伏せは適当でいから、仰向けで寝てくれるかな」

小村

「いくら、友だちでも全裸は恥ずかしいです」

男

「そうだね。全裸になるのは、お客様だから 競パンのままでもいいよ」

▽小村 マットの上に仰向け寝る

男

「小村君、こうして見ても、やっぱりかっこいいよ」

小村

「そうですか」

男

「うんうん。僕が マッサージしてあげたいよ
じゃ、吉賀くん、はじめようか。」

まずは、吉賀君が思う、マッサージをやってみて。それで直してほしいところを
言っよ

吉賀

「はい じゃ、小村君 するね」

小村

「よろしく」

▽吉賀 小村の横に座る

▽吉賀 オイルの瓶から そのまま小村の胸に 勢いよくかける

「おお、大胆でいいね」

▽吉賀 小村の胸の上に散ったオイルを、手でまんべなく伸ばす

「吉賀君、そんなのどうやって覚えたの」

「動画です」

「最近の動画は すごいな」

▽吉賀 小村の下腹部をマッサージをする

▽小村 小村の穿いている競泳水着の前が膨らみはじめ

「小村君、気持ちいいのかい」

男

男

吉賀

男

男

小村

「まあ」

▽小村 恥ずかしそうに、競泳水着を手で隠す

吉賀

「だめだよ。手をどけなきゃ」

▽吉賀 小村の手を退ける

▽小村 競泳水着のウエストバンドの部分から、小村の陰茎の先の割れ目の部分が見えている

吉賀

「小村君、めっちゃ起ってるね」

小村

「しょうがないだろ」

「いいよ。いいよ。気持ちいい証拠だから」

男

「じゃ、吉賀君、カチカチになった物を、ほぐしてあげてよ」

吉賀

「そうですね」

▽吉賀 小村の競泳水着の上に、オイルをビシヨビシヨに垂らす

「何すんの」

小村

「今、言った通り、柔らかくしてあげるよ」

吉賀

▽吉賀 小村の競泳水着の上から くつきりを盛り上がった陰茎を擦り出す

「ちよ、ちよっと」

小村

「小村君、吉賀君の練習の邪魔をしないで」

男

▽吉賀 競泳水着の上から、小村の陰茎を握り扱う

「あ、あ、や、やばいって」

小村

▽吉賀 少し力を入れ 激しく扱きだす

「やばい、やばいって、うう」

小村

▽小村 吉賀の扱くりズムに合わせて、腰が上下する

男

「いいよ、いいよ。このまま いかせてあげて」

小村

▽吉賀 小村の胸に近づけ、乳首を舌でつつき舐め回す

「あ、あ、だめ いく うっ」

▽小村 競泳水着のウエストバンドから少しはみ出していた、先の割れ目から
大量の精液が 小村の腹筋の上に飛び散った

「いいよいいよ。吉賀君、最高だね。次は、小村君の番だね」

○（数時間後）マンションの一室 待機場

昼過ぎなので、待機場には 小村と吉賀しかない

▽吉賀、小村 ソファーに座っている

←# インサート #←

「お客が来たら、そのインターフォンで、何号室か、言うから、
ここの鍵を持って、部屋でお客が、来るのをまつんだよ」

→# インサート #→

▽小村 吉賀 待機部屋のソファーに座っている

「なあ、吉賀、ドキドキするな」

「そうだね。初めてのお客さんで どんな人なんだろう」

「俺、ちゃんと、出きるか心配になってきた」

男

小村

吉賀

小村

吉賀

「大丈夫だって」

○インターフォンが鳴る

“プルプル”

「はい」

店員

「お客さんがいらっしやった。吉賀君、518号室へ行って」

吉賀

「分かりました」

▽吉賀 インターフォンを切る

「じゃ、行ってくるね」

小村

「気をつけて。危なかったら、人を呼ぶんだよ」

吉賀

「大丈夫だって」

□ 第四幕 # おっちゃん VS 吉賀 #

○ エレベーターの中

吉賀が乗っている

○ マンションの通路

吉賀が歩いている

○ 指定された部屋の前

▽ 吉賀 鍵を使いドアを開けて中に入る

灯りや、エアコンが付いている

(数分後)

○ ドアのチャイムが鳴る

▽ 吉賀 インターフォンの画像を見る

小太りの中年の男性が映っている

▽ 吉賀 ドアを開け玄関に向かう

中年男性

▽吉賀 ドアを開ける

小太りの中年のおっちゃんが立っている

「カメラで見るより、ずっとカワイイね」

吉賀

「どうぞ、入ってください」

▽吉賀 中年男性を中に招き入れる

中年男性

「新人さんなんだね」

吉賀

「はい。今日からなんです。でも、今日だけかも」

中年男性

「え、残念だな。次も指名しようと思ったのに」

吉賀

「あ、座ってください。ウーロン茶でいいですか」

中年男性

「ありがとうございます」

▽中年男性 ソファーに座る

▽吉賀 キッチンへ行き、冷蔵庫からペットボトルのウーロン茶を取り出す

中年男性

▽吉賀 ペットボトルを中年男性の前に置く

「ありがとうございます。君も、ここに座りなよ」

▽中年男性 ソファをポンとたたき、吉賀に横に座るよう促す

▽吉賀 中年男性の横に座る

「まじで、かわいいね。何歳」

吉賀

「個人情報教えてはダメな規則なんです」

中年男性

「そうだった。そうだった」

▽中年男性 吉賀のジーンズの上から太股をさすり出す

中年男性

「めっちゃ、タイプ」

吉賀

「ありがとうございます」

▽中年男性 ジーンズの上から吉賀の股間を揉み出す

吉賀

「だめですよ」

中年男性

「いいじゃないか」

吉賀

「だめですって」

中年男性

「おっちゃんが、ズボンを脱がせてあげる」

▽中年男性 吉賀のベルトに手をかける

吉賀

「いえ、ダメですって」

中年男性

「おっちゃん、若い子の服を脱がすときが、興奮するんだよ。な、ちょっとだけ」

▽中年男性 吉賀のベルトをゆるめ、ジーンズのファスナーを下げる

▽中年男性 吉賀の股間を揉みだす

中年男性

「ほら、固くなってきたる」

吉賀

「だめですよ」

中年男性

▽中年男性 しばらく吉賀の股間を揉んでいる

「じゃ、ここからは 後のお楽しみで、シャワーに行こうか」

▽中年男性 立ち上がり、服を脱ぎ出す

▽吉賀 立ち上がり、ハンガーを取ってくる

「これに服をお掛けください」

「ありがとう。早く 君も脱ぎなよ」

中年男性

▽中年男性 全裸になっている

▽吉賀 服を脱ぎ出す

▽中年男性 吉賀の着替えを見ている

▽吉賀 シャツを脱ぎ上半身裸に

「綺麗な身体だね。しゃぶりつきたいよ」

中年男子

吉賀

中年男性

吉賀

中年男性

吉賀

中年男性

吉賀

▽吉賀 パンツを脱いで全裸になる

▽中年男性 吉賀の背後から抱きつく

「お客様、やめてください」

「君も、こっちの人なんだろ」

▽中年男性 吉賀の股間を揉み出す

「だめですって」

「ほらほら、固くなってる」

「揉むからですよ」

「「こ」で、一回出しちゃおうか」

「ダメです」

▽中年男性 背後から吉賀に抱きついたまま、手を吉賀の前に回し吉賀の陰茎を

扱
く

吉
賀

「あ、あ、だ だめ」

▽吉賀 足が震えている

中
年
男
性

「ほら、若いんだから、ぶっ放しなよ」

吉
賀

「あう」

▽吉賀 射精してしまっ

▽中年男性 吉賀の陰茎をゆっくりとし「き、残っている精液が床に落ちる

中
年
男
性

「早かったね。さあ、シャワーに行こう」

▽中年男性 シャワー室に行く

▽吉賀 床に落ちた精液をティッシュで拭く

▽吉賀 競泳水着を履き、シャワー室へ

中年男性

○シャワー室

中年男性がシャワーを浴びている

「ほら、君もシャワーを浴びて

▽吉賀 浴槽の中に入る

▽中年男性 吉賀にシャワーを当てる

「競。パン姿も、カワイイね」

○マンションの一室

中年男性が全裸でマットの上につつ伏せて寝ている

「じゃ、そろそろ初めてもらおうかな」

「じゃ、いきますね」

▽吉賀 中年男性の太ももに座り、背中に、オイルを垂らす

▽吉賀 両手でオイルを伸ばしマッサージを始める

中年男性

中年男性

吉賀

中年男性

▽吉賀 中年男性の背中を両手の平を使い、マッサージ
「はあ、気持ちいいね」

吉賀

「ありがとうございます」

吉賀

「お客さんは、ここによく来てるんですか」

中年男性

「ああ、毎週来てるよ。ここは、いいよ。仕事の疲れが、一発でとれるから」

吉賀

「そうなんですか」

中年男性

「それにね」

▽中年男性 手を後ろの廻し、吉賀の太ももをさする

中年男性

「こうやって、若い男の子を触っていると、心が休まるんだ」

吉賀

「そうなんですが」

▽中年男性 吉賀の太股と擦っている

中年男性

「全然、毛が無いね。剃ってるの」

吉賀

「いいえ、永久脱毛しました」

中年男性

「最近の若い子は、おしゃれだね」

吉賀

「そうかも。でも、僕は、お客さんみたいに、自然な人も好きですよ」

中年男性

「そうなんだ」

▽中年男性 吉賀の競泳水着の中に指を入れ、玉袋を指先で触る

中年男性

「でも、ここは、めっちゃ生えてるね」

吉賀

「そうですね。結構、剛毛って言われます」

中年男性

「うんうん。固そうだ」

▽中年男性 競泳水着の上から吉賀の股間を揉み出す

中年男性

「結構、大きいね。もう起ってるの」

吉賀

「いいえ、まだですよ」

中年男性

「そうなの。じゃ、どこまで大きくなるかな」

吉賀

「さあ」

▽吉賀 中年男性の背中をマッサージをしている

▽中年男性 吉賀の股間を揉んでいる

中年男性

「君って、男もいけるの」

吉賀

「いえ、違いますけど」

中年男性

「そっかな？ ノンケさんなら、こんなにならないと思うけどね。才能有るんじゃない？」

吉賀

「そんなことないです」

中年男性

「男の経験はあるの」

吉賀

「ないですね」

中年男性

「おっちゃんが 教えてあげようか」

吉賀

「今日は、仕事なので、またの機会に」

中年男性

「かわすの うまいね」

吉賀

▽吉賀 マッサージの手を止め、中年男性の太股から離れる

「背中おわりましたんで、表向きになってください」

中年男性

「よいしょっと」

▽中年男性 重い体を、ぐるっと転がし、上向きになる

吉賀

「顔にタオルをかけますか」

中年男性

「いや、君のカワイイ顔を見ていたいからいいよ」

▽吉賀 中年男性の太股に座る

吉賀

「じゃ、はじめますね」

▽吉賀 中年男性の胸、腹の上に、オイルを垂らす

▽吉賀 中年男性の胸の上からマッサージを始める

▽中年男性 手を伸ばし、競泳水着の上から吉賀の股間を揉み出す

吉賀

「お客さん、好きなんですネ」

中年男性

「ああ、特に君のは」

吉賀

「それはありがとうございます」

▽吉賀 陰茎が勃起している

競泳水着のウエスト部分から、亀頭が少しはみ出している

中年男性

「おおきいね。窮屈そうだ」

吉賀

「最近の高校生は、こんなもんですよ」

中年男性

「この前、ネットで知り合った子は、小さくて、反ってたな。君みたいな、真っ直ぐで太いのは見たことないよ」

吉賀

「お客さんののも大きいですね」

中年男性

「そうかな」

▽吉賀 中年男性の陰茎を握り、優しく扱く

吉賀

「そろそろ出しましょうか」

中年男性

「ずいぶん、積極的だね」

吉賀

「僕は、もう出しましたから」

中年男性

「俺はもういいんだよ。今度は、俺がマッサージをしてあげよう」

吉賀

「え」

中年男性

「いいから、今度は、君がここに寝てくれるかい」

▽中年男性 上半身を起こそうとする

中年男性

吉賀

中年男性

吉賀

中年男性

▽吉賀 中年男性の上から降り、横に移動

▽中年男性 上半身を起す

「さあ、ここに寝て」

「そう言われても」

「ここは俺たちのような者を癒やす場所なんだろ。俺が君をマッサージすること、俺も癒やされるんだよ」

「わかりました。じゃ、お言葉に甘えて」

▽吉賀 うつぶせでマットの上に寝転ぶ

「仰向けで寝てくれるかな」

▽吉賀 仰向けになる

▽中年男性 吉賀の身体をじっとみる

中年男性

「ほんと、綺麗な身体だ」

▽中年男性 オイルの入った入れ物を持ち、吉賀の胸から、股間に垂らしたす

▽中年男性 指先で吉賀の乳首を刺激する

吉賀

「あん、あん」

中年男性

「感じやすいんだね」

▽中年男性 吉賀の競泳水着の上から、もっこりした股間を揉み出す

中年男性

「もう、固くなってるやないか。やらしいな」

▽中年男性 競泳水着のもっこりした部分を、指で掴み扱きだす

吉賀

「あ、あ、あう」

▽吉賀 腰が上下に動く

中年男性

「腰の動きが やらしいの」

中年男性

▽中年男性 吉賀の競泳水着の上から、もっこりした部分にかみつく

「うーん。美味しいな」

▽中年男性 吉賀の競泳水着の上を舌で舐め回る

▽中年男性 吉賀のヘソ、乳首を舌で舐め回す

▽中年男性 手は、ずっと吉賀の股間を扱っている

中年男性

「びんびんや。そろそろ、挿ませてもらおうで」

▽中年男性 吉賀の競泳水着をゆっくりと脱がす

吉賀のビンビンになった、陰茎が飛び出てくる

中年男性

「でかいね」

▽中年男性 吉賀のビンビン陰茎を弾いて遊び出す

中年男性

「こんなになって、どうしてほしい」

中年男性

▽中年男性 吉賀の陰茎をギュッと握る

「どうして ほしい」

吉賀

「いかせて ください」

中年男性

「うんうん。 百点満点」

吉賀

▽中年男性 吉賀の陰茎を口で啜えて扱きだす

▽吉賀 腰をふっている

「や、やばい。いきそつ」

吉賀

▽中年男性 吉賀の亀頭の割れ目を高速に舌で舐める

「あ、いく、いく・・・うっう」

▽中年男性 吉賀の陰茎を口に含む

▽吉賀 腹が大きく波打つ

吉賀

▽中年男性 吸い込んでいる

「あっ、あっ、あっ」

▽吉賀 動きが止まる

「うっ」

吉賀

▽中年男性 吉賀の陰茎から口を離し、上半身を起こす

「ミルク、もっと欲しい」

中年男性

▽吉賀 方針状態

ビンビンだった陰茎は、萎んでいた

「ミルク、ミルク」

中年男性

「もう、無理ですよ」

吉賀

▽中年男性 吉賀の上に覆い被さり、吉賀の乳首を舐め始める

吉賀

「あっ、あっ」

▽中年男性 吉賀の股間を握り、抜き始める

中年男性

「ほら、もう元気なってきた」

▽中年男性 抜く速度を速める

(クチャクチャクチャ)

中年男性

「こんなに我慢汁出して、君もそうとうエロいな」

吉賀

「あ、ああ・・・また、いく・・・いく・・・」

▽吉賀 亀頭の先から精液が、ドロっと流れる

▽中年男性 吉賀の陰茎を咥える

▽中年男性 頭を振りながら陰茎を吸い込む

吉賀

「あ、あ、い、痛いです」

吉賀

▽中年男性 亀頭の割れ目を下で舐める

「い、痛いです」

▽中年男性 吉賀のへそ、腹、乳首を舐めていく

▽中年男性 吉賀の口にキスをしよとする

▽吉賀 顔を背ける

「おっちゃんとキスは無理だよね」

▽中年男性 吉賀の横に寝転ぶ

手は、吉賀の陰茎を握っている

「いっぱい だね。おいしかった」

▽中年男性 立ち上がり、シャワーを浴びに行った

中年男性

中年男性

○待機所

小村 吉賀がソファーに座り話をしている

「え？ まじで、射精させられたの」

「うん。びっくりしたよ」

「え？ どうしよう」

▽小村 インターフォンを押し、男と話をする

「あおの」

「どうしたの」

「俺ら、射精させられる っ て聞いてないんですけど」

「ああ、それは客によるよ。さっきのケースはまれさ。

もし、嫌だったら、嫌って言えばいいよ。それでも断れないなら、部屋のインターフォンで、俺を呼んでくれるかい」

「わかりました」

小村

男

小村

男

小村

小村

吉賀

小村

男

「それに、一回いくことで、千円バイト代上乘せになるんだよ。こんなに割のいいバイトは他にないけどな」

小村

「そうなんですか。一回千円って、すごいな。俺十回くらい射精してもいいや」

(吉賀)

(さすがに十回は無理でしょ)

男

「まあ、気にしない気にしない」

小村

「今日だけだし、イカされるだけなら、まあいいか」

(吉賀)

(いや、だから・・・)

(数分後)

▽インターフォンが鳴る

▽小村 インターフォンに出る

「お客さんだけど、どっちが行ける」

男

小村

「俺が行きます」

男

「じゃ 204号室で待機してくれる」

小村

「わかりました」

▽小村 インターフォンを置く

吉賀

「お客さん来たの？」

小村

「よし、いよいよ、俺の出番だ」

吉賀

「気をつけてね」

小村

「大丈夫。俺が終わったら、帰ろうぜ」

吉賀

「そっだね。そうしよう」

▽小村 鍵を持って、出て行く

□第五幕

青年（古屋） VS 小村

○マンションの通路

▽小村 204号室に向かって歩いている

「ああは言った物の心配だな」

○204号室の前

▽小村 204号室の扉を開ける

「失礼します」

小村

▽小村 部屋に入る

バリ風の家具が かざられ、ちよつとしたリゾートの雰囲気

（まもなく）

(インターフォンが鳴る)

▽小村 扉を開ける

▽青年(古屋)が立っている

イケメンのスーツで、スラリとした若い青年

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

▽古屋 小村の全身をみる

「俺 好みでよかった」

「中に入ってください」

▽小村 古屋を中に入れる

▽小村 ドアのロックをかけて、部屋に入る

「どうぞ、座ってください」

小村

小村

古屋

小村

古屋

古屋

「ああ、ありがとう」

▽古屋 ソファーに座る

小村

「飲み物は何がいいですか」

古屋

「ミネラルウォーターをもらおうか」

▽小村 キッチンの冷蔵庫から、ペットボトルのミネラルウォーターを取り

古屋のテーブルの上に置く

小村

「どうぞ」

古屋

「ありがとう」

古屋

「若い子が出てきた驚いたよ」

小村

「僕もです。こんなカッコイイ人が来るなんて」

古屋

「かつこいいか。ありがとう」

小村

▽古屋 ペットボトルの蓋を開け、ミネラルウォーターを一口飲む

「まずは、シャワーで、身体を洗いますので、服を脱いでいただけますか」

古屋

「ああ、分かった」

▽古屋 ジャケットを脱ぐ

小村

「ジャケットは、こちらに」

▽小村 手を出す

▽古屋 ジャケットを小村に渡す

▽小村 ハンガーにジャケットを通し、ハンガーラックにかける

▽古屋 カッターシャツを脱ぐ

筋肉質の綺麗な身体だ

「どうした、君も脱がないのか」

小村

「あ、すみません。」

古屋

小村

古屋

小村

古屋

小村

古屋

▽小村 トレーナーを脱ぎ、スエットを脱ぐ
スエットの下は競泳水着を履いている

「いいからだしているね」

「俺がですか」

「ああ、今までであった中でも最高だ」

「そんなこと言われると照れますよ」

▽古屋 スラックスを脱ぎ、パンツを脱ぐ

「じゃ、シャワーに行こうか」

「はい」

▽小村 古屋の体に石鹸をつけ洗う

「君はいくつだい」

小村

「十八歳です」

※本当は16歳 店の男に18才というように言われてる

古屋

「そうか、大学生か。若く見られるだろ」

小村

「そ、そうですね」

▽小村 古屋の体にシャワーをかけ石鹸を流す

▽小村 バスタブから出て、棚からバスタオルを取り、古屋に渡す

▽古屋 バスタブから出て、バスタオルを受け取り、体を拭き始める

▽古屋 ある程度、体を拭くと、バスルームから出ていく

▽小村 バスタオルで体を拭く

○部屋

腰にバスタオルを巻いた古屋が、ソファアに座っている

▽小村 競泳水着 だけ穿いた姿で部屋に戻ってくる

古屋

▽古屋 小村の競泳水着の膨らみを見る
「かっこいいね」

小村

「では、マットの上うつ伏せで寝ていただけますか」

古屋

「ああ」

▽古屋 腰に巻いているバスタオルを取り マットうつ伏せで寝る

▽小村 古屋の脇腹の横に膝を立てて座る

▽小村 オイルの瓶を手に取り、もう片方の手の平にオイルを垂らす

小村

「では、はじめます」

古屋

「よろしく」

▽小村 古屋の背中を優しくマッサージする

古屋

「君は、いつから始めたの」

小村

「今日からです」

古屋

「今日からか」

小村

「でも、今日で終わりです」

古屋

「今日で？」

小村

「はい。彼女にクリスマスプレゼントを買ってあげたくて、一日だけのバイトなんです」

古屋

「そっか。おしいな。また次もお願いしたかったのに」

小村

「すみません」

古屋

「君が謝ることではないよ。今日、君に会えて、ラッキーだと思うよ」

小村

「はい。僕も。最初で、最後のお客さんが、こんなにカッコいい人でラッキーでした」

古屋

「そっか。それはよかった」

小村

「はい」

▽小村 マッサージを続けている

小村

「背中終わりましたので、仰向けになってもらえますか」

古屋

「ああ。あんまり気持ちいいから、寝かけていたよ」

▽古屋 体を少し起こし、回転させ表向きになる

古屋の股間が見えてしまう

小村

「タオルをおかけしましょうか」

古屋

「別にかまわないが、君に任せるよ」

▽小村 古屋の股間が隠れるように、タオルをかける

小村

「本当にカッコイイ身体ですね。憧れますよ」

古屋

「そんなに、誉めてもらってもバイト代は出ないよ」

▽小村 古屋の胸にオイル垂らす

古屋

▽小村 古屋の胸をマッサージしはじめる

「マッサージ上手だね」

小村

「そうですか」

古屋

「ああ、おかげで、ここが こんなになつたよ」

小村

▽古屋 少し顔を上げ、股間にかけてタオルが突き上がっているのを見る

「ほんとうだ」

古屋

「君は、どうなんだい」

▽古屋 競泳水着の上から、小村の股間を揉み出す

小村

「お客さん、ダメですよ」

古屋

「あれ、君も起ってきてるじゃないか」

小村

「揉まれると誰だって、起ちますよ」

古屋

「ちょっと見せてもらってもいいか」

小村

「ええ」

▽古屋 上半身を起こす

▽小村 膝を立てて古屋の前に座っている

▽古屋 小村の競泳水着を下にずらす

小村の陰茎が飛び出す

古屋

「大きいね」

小村

「どうして、大きいといいんですか。僕はわかりません」

古屋

「ははは 男は大きいと言われると嬉しいものなんだよ」

小村

「そうなんです。僕の友達も、めちゃくちゃデカイですよ。それに剥けているんです」

古屋

「そうなの？ 一度、見てみたいな」

小村

「今は、待機室で僕の帰りを待ってるんですよね」

古屋

「それなら」

▽古屋 立ち上がりインターフォンの前に

▽古屋 インターフォンのボタンを押す

○待機部屋

着替えが終わり、帰るのを待っている吉賀がソファに座っている

▽インターフォンが鳴る

▽吉賀 インターフォンを取る

○小村と古屋の部屋

古屋が腰にタオルを巻き、ソファに座っている

(ドアのチャイムが鳴る)

▽小村 競泳水着だけの姿でドアを開ける
ドアを開けると 吉賀がたっている

吉賀 「小村君、どうかしたの」

小村 「吉賀こそ」

吉賀 「僕は、小村君の居るところに行くようになって言われて、何かあったのか心配して慌ててきたよ」

▽古屋 部屋の奥から、玄関の二人に声をかける

古屋 「俺が呼んだんだ」

小村 「取りあえず、入って」

▽吉賀 部屋の中に入っていく

部屋に入ると、ソファーに座っている古屋がいる

古屋 「はじめまして、君が吉賀君。ヨロシクね」

吉賀

「はい、よろしくです」

▽吉賀 小村の方に向く

吉賀

「何が、どうなってるの」

小村

「僕にもわからないよ」

古屋

「君のアソコが、立派って言うから、どんな子か、会ってみたくて呼んだんだ」

吉賀

「そうなんです。でも、僕は仕事が終わりましたので」

古屋

「そうなんだ」

▽古屋 立ち上がり叫ぶ

古屋

「おい、店員 どうする」

▽男 インターフォンを通して

男

「おい、お客さんに失礼だぞ。まだ仕事しろ」

吉賀

「僕は、仕事終わりですよ」

男

「わかった。じゃ、君らのバイト代は払わない。お客様を怒らせたんだからな」

小村

「そんな」

吉賀

「わかりました。やりますよ、やりますよ」

男

「最初から、そう言えばいいんだよ」

(インターフォンが切れる)

古屋

「話では終わったようだね」

吉賀

「そうですね。じゃ、ちょっと着替えます」

▽吉賀 上着、シャツを脱ぎ上半身は裸になる

「なんて綺麗な身体なんだ。透き通ってるようだ」

▽吉賀 ジーンズを脱ぐ

古屋

高校のランパン姿になる

▽古屋 吉賀のランパン姿を見る

「君らは、姫磨工業高校の生徒か？」

「そうですけど」

「大学生じゃないのか」

「はい」

「なんてことだ。未成年じゃないか。いくら俺でも未成年とはできないな」

「すみません。店の人に、大学生だって言うよに言われてたんです」

「そっか。でも、俺がしなければいいんだし。君たちで、セックスしてるところを見せてくれよ」

「せ、セックスって」

「何を驚いているんだ。ここは そういう場所だぞ」

古屋

吉賀

古屋

吉賀

古屋

小村

古屋

小村

古屋

小村

「まじか」

古屋

「そういう場所とは知らなかったのか」

小村

「ええ、ただのマッサージする場所だと」

古屋

「そっか。それは困ったな。すでに大金を払ったんだからな。どうしたものか」

吉賀

「セックスは無理ですけど、僕が、小村くんをいかせるのは、どうですか？」

古屋

「なるほど。でも、それだと君がいくところ見たい俺がなっとくできない」

吉賀

「じゃ、あなたは僕をいかせてください」

古屋

「よし、それで手をうつと」

小村

「よ、吉賀」

吉賀

「そういうこと。しょうがないよ。小村君 かくして」

小村

「ちよ、ちよっと待ってよ」

吉賀

「何をいまさら。小村君、僕になんかめいかされるでしょ」

小村

「そりゃそうだけど」

古屋

「君たちは、そんな関係だったのか」

小村

「ち、違います。なりゆきで。そんなことがあっただけです」

古屋

「まあ。いいか」

吉賀

「小村君、さっさと済ませて帰ろっよ」

小村

「わかった」

吉賀

「じゃ、マットの上に寝てくれ」

▽小村 マットの上に仰向けに寝転ぶ

▽吉賀 小村の上に寝転ぶ

小村

▽吉賀 小村の乳首を舐め始める

「くすぐりたいよ」

▽吉賀 自分の顔を小村の顔に近づける

▽吉賀 小村にキスをする

▽小村 目を大きく開いてしまう

▽吉賀 口から離し、首、胸、腹と舌で舐めていく

▽吉賀 小村の競泳パンツの上から、膨らんだところを舐める

小村

「あ あ、あ、っ」

▽小村 目を瞑りながら腰を振る

▽古屋 ソファーに座り、二人の行為を見ている

▽吉賀 小村の競泳水着を脱がす

小村の陰茎が飛び出てくる

小村

▽吉賀 小村の乳首を舐めながら、片方の手で、小村の陰茎を扱きはじめる

「あ、あ や、やばい、で、でそう」

▽吉賀 小村の陰茎を激しく扱きだす

小村

「あ、ああ、あ う」

▽小村 腰が大きく持ち上がる

勢いよく、小村の精液が飛び散る

▽吉賀 小村の陰茎をゆっくりと扱き、精道に残った精液を搾りだす

▽小村 目を瞑り、深呼吸をしている

吉賀

「いっちゃったね」

▽吉賀 古屋の方を見る

古屋

「よかったよ。じゃ、次は、俺が君をいかせる番だな」

吉賀

▽古屋 ソファーから立ち上がる

「約束ですもんね」

▽吉賀 立ち上がる

▽古屋 吉賀の背後に回る

▽古屋 吉賀の背後から吉賀に抱きつく

▽古屋 吉賀の顔を右に向け 吉賀にキスをする

▽古屋 キスをしたまま、片方の手の指先で、吉賀の乳首をまさぐる

▽古屋 吉賀の乳首をつついた後、手を下げていき、吉賀のランパンの中に手を入れ
吉賀の陰茎を握る

▽古屋 吉賀の陰茎を扱きだす

▽古屋 吉賀とのキスをやめる

古屋

「小村君の言ったとおりだ。大きいね」

▽古屋 吉賀の陰茎を扱きだす

吉賀のランパンが激しく動いている

吉賀

「あっ、あっ」

▽吉賀 足がガクガクとなる

▽古屋 もう片方の手は、吉賀の乳首をいじっている

吉賀

「あっ い、いきそっ」

▽古屋 吉賀のランパンの中につっこんだ手を激しく動かしている

吉賀

「あ、あ、い、いく」

▽吉賀 足が大きくがたつく

吉賀

「あっ」

古屋

▽古屋 ランパンの中の手をゆっくりと動かす

吉賀のランパンの裾から、ふとももに刺って、精液が流れ落ちる

「見せて」「らん」

▽古屋 吉賀のランパンのウエスト部分を広げて覗く

「いい子だ」

吉賀

「僕も、とても気持ちよかったです」

古屋

「素直だな」

吉賀

「そうですね。そろそろ時間なんで」

▽古屋 壁にかけている時計を見る

「時間が経つのが早いな」

古屋

▽吉賀 シャワールームの方に行こうとする

「最後のシャワーは俺一人でいいよ。君は、友だちと後で入ってくれ」

▽古屋 バスタオルを手に取り、シャワールームへ

(数分後)

▽古屋 腰にバスタオルを巻いて、バスルームから出てくる

吉賀は、ランパンを穿いたまま 立っている

小村は タオルを腰に巻いた状態で、マットの上でに座っている

「今日は、楽しかったよ」

「僕も よかったです」

「商売が上手だな」

「いえ、本当です」

「今日で、最後って残念だよ」

「僕もです」

「じゃ、個人的にでも会おうか」

古屋

吉賀

古屋

吉賀

古屋

吉賀

古屋

吉賀

「すいません。嘘をついてました」

古屋

「おもしろい子だ」

吉賀

「そうかも」

古屋

「じゃ、俺は失礼するかな」

▽古屋 吉賀のに近づく

▽古屋 吉賀の正面に立ち、顔をじつとみる

▽古屋 吉賀を両手で抱き、キスをする

▽古屋 吉賀とのキスを止め、手を離す

▽古屋 部屋から出ていく

▽吉賀 小村の方を見る

「じゃ、僕らもシャワー浴びて帰ろうか」

吉賀

▽小村 立ち上がる

○受付のあるマンションの部屋

吉賀、小村 受付の男がいる

▽男が椅子に座っている

「今日のバイト代」

▽男 お金の入った封筒二つを小村 吉賀に差し出す

「ありがとうございます」

「次は、いつこれるかな」

「いえ、最初に言いましたけど、これで終わりにします」

「何言ってるんの、君らは ここですとバイトするんだよ」

男

小村

男

小村

男

小村

「いえ、無理ですよ」

男

「無理って。そんな事いうと、さっきのやっつたところの動画を、ネットに流しちゃうよ」

小村

「え?」

男

「しっかり、録画してあるからさ」

小村

「消して下さい」

男

「無理だね。でも、君らが、バイトを続けている限り大丈夫だよ」

小村

「そんなの卑怯です」

男

「金儲けに卑怯は、つきものさ」

吉賀

「小村君、僕らの負けだよ。行こう」

小村

「吉賀、いいのか」

吉賀

「だって、話がわかる人じゃなさそうでもない。今日は帰るしかなさそうだよ」

男

吉賀

男

「吉賀君、物わかりいいね」

「行く」

「じゃ、来週も同じ時間にきてくれよ」

▽吉賀、小村 部屋を出る

Copyright@2020 D³S

□ 第六幕 翌週

○（翌週の土曜日）マンションの入口

小村、吉賀は しょうがなくマッサージのあるマンションの下に来ている

▽小村 マンション入り口でインターフォンのボタンを押そうとしている

「絶対、断ろうな」

「そうだね」

「ダメなら警察にでも言うって言うしかないよ」

「うん。そうしようか」

「じゃ、押すぞ」

▽小村 入り口のインターフォンで部屋番号のボタンを押す

（応答がない）

「よし、もう一回」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

小村

小村

吉賀

▽小村 インターフォンのボタンを押す

(反応がない)

「どうしたんだろう」

「どうしたのかな」

(少しして)

○マンションの中から、このマンションの住人と思われる人が扉を開けて出てくる

▽吉賀、小村 その隙に建物の中に入る

○マンションのエレベーターの中

小村 吉賀が乗っている

「なんとか入れたな」

「そうだね」

小村

吉賀

(エレベーターが止まる)

○マンションの通路

小村 吉賀 歩いている

○(同) 受付のあった部屋の前

▽吉賀 小村 部屋に近づくと、部屋のドアを囲むように、コーンが置かれ、黄色いテープで囲んでいた

▽小村 ドアの端や、通路に面した硝子が黒くなっていることに気づく

(ドアが開く)

▽警察官 中から出てくる

小村、吉賀に気づく

「君ら、ここの住人の知り合いかい？」

「いえ、別の階の者ですけど、どうしたんですか？」

▽吉賀 知らない振りをする

警察官

吉賀

警察官

「じゃ あっちに行ってくれるかな」

吉賀

「何かあったんですか」

警察官

「君は、昨日の火事しらないの？」

吉賀

「あ、昨日は、この友達の家泊まってたんです」

警察官

「そうか。取りあえず。まだ現場検証してるから、ここから離れてくれるかな」

吉賀

「はい、失礼しました」

吉賀

「行こう、小村君」

▽吉賀 小村 その場を離れる

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第七話

夢雄
美侶

サブタイトル 「クリスマス大作戦 滝本 & 小雪 編」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□ 第一幕 突然の再開

○ (クリスマスの数日前の夕方) 道

▽ 滝本 学校からの部活帰り。自転車を漕ぎ、家に向かって

「すっかり、遅くなったな」

「キヤッ」

○ 自転車同士が衝突する

キキッー

ドシーン

「いって」

▽ 滝本 転けて倒れている 小雪に

「大丈夫ですか」

滝本

小雪

滝本

滝本

小雪

「ごめんなさい。よそ見してたの」

▽小雪 顔を上げて、滝本の顔を見

小雪

「あなた」

滝本

「あの時の」

▽滝本 小雪に手を差し出す

▽小雪 滝本の手を掴んで 立ち上がる

小雪

「本当に ごめんなさいね」

滝本

「はい、俺は、大丈夫です。そちらこそ」

小雪

「私は大丈夫よ」

▽小雪 滝本の全身を見る

滝本の足を見ると、ズボンが膝が破け、血が流れている。

小雪

「あら？ 血がでてるわ。家が近くだから、寄って手当てしていきなさい」

滝本

「大丈夫ですって」

小雪

「ダメダメ。ほら」

半ば、強制的に、滝本は、夫人の家に連れていかれた。

○小雪の住んでいるマンション

そこそこ広いマンションの一室に連れて行かれ、リビングに通された。

▽小雪 滝本を見る

「早くズボンを脱いで」

「いえ、大丈夫ですって」

小雪

「だめよ。すぐに消毒しなきゃ」

▽滝本 言われるがままズボンを脱いだ

▽小雪 膝下の血が滲んでいるところに、消毒スプレーをかける

滝本

「痛っつ」

小雪

「男の子でしょ」

滝本

「男だって、痛い物は、痛いの」

小雪

「そっよね」

小雪

「さあて、これでいいわ。あとは・」

滝本

「ありがとうございます」

▽滝本 ズボンを穿こうとする

小雪

「ちょっと待って」

○小雪 リビングから出て行く

▽滝本 ソファーに座り、当たりを見回している

(数分後)

小雪

▽小雪 手に学生ズボンを持って戻ってくる

「これ、どうかしら??」

滝本

▽小雪 学生ズボンを広げて、滝本に見せる

「これは?」

小雪

「亡くなった主人が、学生の時のものなの。あなたのが、破れてしまったので、
どうかと思いい」

滝本

「え? 亡くなった・・・大切な物じゃないの?」

小雪

「そうね。でも、この前、あなたに初めて会ったとき、
どことなく、主人の面影があったの。あなたが、穿いてくれたら」

滝本

「俺が穿いたら??」

小雪

「いえ、なんでもないわ。穿いてみて」

▽小雪 滝本にズボンを渡す

滝本

▽滝本　ズボンを受取り穿いてみる

「ちょっと、ウエストが大きいですね」

▽小雪　滝本のズボンのウエスト部分に指を入れる

「ほんの少しね。直ぐに直すわ。もう一回　脱いでくれる」

小雪

▽滝本　ズボンを脱ぎ渡す

▽小雪　ズボンをテーブルに置き別の部屋へ

(直ぐに)

▽小雪　片手に、大きな木箱を提げて戻ってくる

大きな木箱をテーブルに置き、上の蓋を開くと、裁縫道具が、ぎっしりと詰まっていた。

黒い糸と針を取り出し、ズボンのウエスト付近を詰め、縫いだした。

滝本

「すごい、そんなことも出きるんですね」

「主人って、服を買うのが苦手で、私が買ってきては、こーやってサイズを

小雪

合わせてたの」

「へえー」

「さあ、もう終わりよ。もう一度、穿いてみて」

▽小雪　ズボンを滝本に渡す

▽滝本　ズボンを穿いてみる

「ぴったりです」

「そう、よかったわ。

破れた方のズボンは、また直しておくから、取りにいらっしやい」

「そんなのいいですよ」

「ダメダメ。じゃ、連絡先教えてくれる？」

▽滝本　ポケットから、スマホを取り出した

▽小雪、滝本　連絡先を交換する

小
雪

滝
本

小
雪

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

▽小雪 スマートフォンに登録しようとするが、名前を知らなかった

「そういえば、名前を聞いてなかったわ」

「ほんとうだ」

「名前 教えてくれる？」

「たきもと です」

「下は？」

「下もですか？」

「早く教えて」

▽滝本 恥ずかしそうにしている

「恵（めぐみ）です」

小雪

「あら？ 素敵な名前」

滝本

「俺、女みたいで嫌なんですよ。だから、みんなには、けい　って呼んで
もらってます」

小雪

「そんなことないわ。素敵よ」

滝本

「じゃ、僕にも名前を教えてくださいませんか？」

小雪

「私は、小雪（こゆき）よ」

滝本

「上の名前は？」

小雪

「忘れたわ」

滝本

「ズルイですよ」

小雪

「ごめんなさい。田中　小雪よ。二月の雪が降っている日に生まれたからって
両親が付けてくれたの。きっと　あなたの名前も両親が一生懸命に考えて
付けてくれたはずよ」

滝本

「小雪さんですか。カワイイ名前ですね」

小雪

小雪

「ありがとう」

「さあ今日は、もう遅いから。ズボン、直したら連絡するわね」

▽滝本 小雪の家から出る

Copyright@2026 D³S

□第二幕 小雪の家でクリスマス

数日後、滝本に、連絡があった。
ズボンのほつれを直したので取りに来るようにと。

○（クリスマスイブ）の昼 小雪が住んでいるマンションのドアの前

滝本が、チャイムを押す

、ピンポーン、

（ドアが開く）

中から小雪が顔を出す

「いらっしやい」

「こんにちは」

「さあ、入って」

「お邪魔します」

▽小雪 滝本を部屋の中に招き入れる

小雪

滝本

小雪

滝本

○(同)リビング

▽滝本 ソファーに座る

「寒かったですよ」

「はい」

「ごめんなさいね。こんな日に来てもらって」

「いえ、部活の帰りですから」

「クリスマスイブなのに部活なの？彼女さんに怒られるわよ」

「そんなのいませんよ」

「本当かしら」

「本当ですよ」

「何か、温かい飲みものを入れるわね。あ、それよりも、お腹空いてないかしら」

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

「どちらかと言うと、何か食べたいです。部活終わってすぐにきましたので」

小雪

「ごめんなさい。気がつかなくて」

滝本

「俺も催促したみたいで すみません」

小雪

「じゃ、何か作るわ。私も まだ食べてないの」

滝本

「ありがとうございます」

小雪

「じゃ、今から作るから、シャワーを浴びてきていいわよ」

滝本

「いいんですか？」

小雪

「ええ、もちろん」

滝本

「助かった。ちょっと汗が気になったってたんですよ」

小雪

「あら、汗の臭い いいじゃない」

滝本

「え、いいんですか」

小雪

「ぜんぜん、いいわよ。でも、折角の料理のいい匂いが汗の臭いで台無しになるから、シャワーは浴びてきてほしいわ」

滝本

「はい。わかりました」

小雪

「後で、バスタオルと着替え持って行くわね。バスルームは、廊下を出て左よ」

滝本

「はい」

▽滝本 リビングから出ていく

○（同）バスルーム

滝本が立ってシャワーを浴びている

“ガラツ” （バスルームの前の扉が開く音）

▽滝本 すりガラス越しに、小雪の影が見える

（小雪さんが、バスタオルを持ってきてくれたのかな）

“カチツ” （バスルームの扉が開く音）

（滝本）

(滝本)

(え)

▽滝本 扉を見る

胸から腰にかけて、バスタオルを巻いた小雪が立っている

「小雪さん」

小雪

「思ったより、料理が早くできたので、私もシャワーを浴びていいかしら」

▽小雪 視線を滝本の股間に

▽滝本 片手で自分の股間を隠し、背中を向ける

小雪

「見てないから大丈夫よ。背中、流しましょうか？」

滝本

「大丈夫です。俺、直ぐに出ますので」

小雪

「いいのよ。背中流させて欲しいの」

▽滝本 股間を隠しながら小雪の方を向く

滝本

「どうして？」

小雪

「あなたを見ると、どうしても、主人を思い出してしまふの。昔、よく主人の背中を流したのを もう一度 したくて」

滝本

▽滝本 少し考える

「お願いします」

小雪

「ありがとう」

▽滝本 小雪に背中を向ける

▽小雪 ボディークリームを手の平に出し、手の平で優しく滝本の背中をさすりだす

小雪

「なにから なにまで、主人と同じだわ」

滝本

「そうですか」

小雪

「ああ、懐かしい」

▽小雪 滝本の背中に頬を付ける

小雪

「温かい」

滝本

▽小雪 両腕を前に回し、滝本を抱きしめる

「こ、小雪さん」

小雪

「少しだけ、少しだけ、こうさせていて」

▽滝本 滝本の胸にある小雪の手の上に、自分の手を重ねる

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第八話

夢雄
美侶

サブタイトル 「クリスマス大作戦 美優 & 小村 編」

あらすじ

思い切って小村が美優をクリスマスのデートに誘います

そして、デート中、シャイな小村はなんと2回も出してしまうのです

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□ 第一幕 小村からの誘い

次は、美優と小村。

主役級の二人ですが、主役ゆえ、あまり発展がないんですよ。シャイで、純情で、ウブな、まるで、作者といっしょ

本当は、この世のものと思えない エロシーンを描きたいのですが、期待しないでください。

なんと言っても、作者自身が、しらゆりの様な可憐で、清楚で、エロ無縁なのですから

○ (クリスマススイブ) 二年二組の教室

▽ 美優、智美、松子が話をしている

「ああ、今日で二学期も終わりかあ」

「ほんとね。二学期って、一番 長いはずなんだけど、あっというまに終わったって感じ」

「年を取ると、時間の流れが早いつて言うわよね」

「もう、おばさん臭いこと言わないでよ」

美優

松子

美優

松子

智美

「大人になったって、言ってほしいわ」

美優

「みんなは、冬休みは、何するの？」

智美

「今のところ予定なし。美優は？」

美優

「私も何も無いわ。ま、大掃除ってとこね」

松子

「私は、大晦日まで、バイトだわ」

智美

「松子は、がんばるなあ」

▽小村 吉賀 がやってくる

小村

「なんの話、してるの？」

智美

「小村君、冬休みにするかな？ なんてね。」

小村

「オレは、寝正月」

智美

「ええー 若いもんがー」

松子

「吉賀君は？」

(美優)

(どうせ、常夏のハワイって言うんだろっな)

吉賀

「今年は、家でのんびりだね」

松子

「そうなの」

(美優)

(お！ やっと庶民らしく なってきたな)

吉賀

「プライベートジェットのパイロットが、インフルエンザにかかっちゃってさ、飛行機飛ばせないんだ。今からだと、庶民の乗る飛行機は、予約が採れないし、しかたないよ」

(美優)

(おお、ついに、庶民を敵にまわしたな)

松子

「ねえ。せっかく、みんな、いるんだったら、初詣でにいかない？」

智美

「いいわね」

美優

「でも、男二人に、女 三人じゃね」

智美

▽智美 松村の背中を見る

「ねえ、松村君」

▽松村 智美の声に気づき振り向く

智美

「松村君は、正月何するの」

松村

「うーん、家でテレビ見てるよ」

智美

「じゃ、決まりね。お正月、私たちと、初詣よ」

松子

「智美、けっこうやるわね」

(美優)

(え、智美 いつから根暗オタクと)

智美

「何が？」

松子

「松村君のこと、結構 気にしてるでしょよ」

智美

「そんなんじゃないわ。夏休みのメンバーよ」

松子

智美

小村

美優

小村

美優

「まった、まったー」

「待ち合わせ場所なんかは、直前でするわね」

「夢前 明日、ヒマ？」

「え？ ええ。明日は部活ないから」

「じゃ、後で、メールする」

▽小村 その場所から離れる

○（夕方）美優の家のリビング

美優は家のソファでくつろいでいる

▽美優 スマートフォンにメッセージが届く

「あら、小村君からだわ」

▽美優 メッセージを開く

美優

「明日、少し逢える？」

「明日かあ、どうしようかなあ？
なんてね。」

小村君からのクリスマスの誘いだわ。楽しみ。もち、オツケーで、返信と」

▽美優 小村に返信する

Copyright@2026 D³S

□第二幕 街中

○（次の日のクリスマス） 昼間の駅前

▽美優 小村との待ち合わせ場所に行く

小村は、自転車を降り、自転車を持って待っている

「ごめん、待った？」

「ううん、俺も今来たところ」

「よかった」

「急に会いたって、どうしたの？」

（ふふふ、ちょっと、いじわるな、わ・た・し）

「えっと、クリスマスだろ、俺、暇だったしい、夢前も、暇だったら・・・
あ、ごめん、忙しいよね」

「そうね、忙しい くらいに、暇だったわ。小村君こそ、大丈夫なの？」

美優

小村

美優

美優

（美優）

小村

美優

小村

「俺は、平気。妹に、クリスマス家に来て、淋しいやつ、って言うから、クリスマスは、家にいないぞって、言ってしまった手前、帰り辛いんだよ」

美優

「あら、そうなの。じゃ、どこかに行きましょうか」

小村

「そうだね。ちょうど、面白い映画をやってるんだ」

(美優)

(映画って、雑誌の情報だな)

美優

「わ、楽しみ」

▽美優と小村は、街の小さな映画館に向かっている

○街中

自転車を押して歩く小村と、その横を歩いている美優

□ 第三幕 映画館

○ 映画館の座席

売店で、ポップコーンとコーラを買い、部屋に入る。

その映画館は、今では珍しい自由席だ。

一列、丸ごと空いている所の真ん中に座った。

(程なくして、映画の上映が始まる)

グロテスクなシーン

「いやーん」

▽ 美優 思わず、隣の席の小村に身を寄せる

「大丈夫だよ」

▽ 小村 美優の手を握る

(ちょっと、わざとらしくったかな)

残虐なシーン

美優

小村

(美優)

小村

▽美優 小村の胸に顔をうずめる

「大丈夫、大丈夫」

美優

「私、無理 無理」

▽美優 小村の股間に顔を押し当て、頭を振る

(美優)

(小村君の股間 ちょっと固くなってるんじゃない)

小村

「大丈夫だって」

▽小村 美優の頭を撫でている

美優

「無理よ 無理」

▽美優 さらに小村の股間を頭を揺さぶり刺激する

▽小村 美優の頭を撫でている

しかし、美優の刺激に、下半身が徐々に反応していく

(小村)

小村

(やば。起ってきた)

「夢前、大丈夫だった」

▽小村 美優の頭を持ち上げようとする

「ほんとう」

美優

(美優)

(ち、もう少し だったのに)

残虐なシーン

▽美優 残虐なシーンを見てしまう

(美優にとっては 平気)

「きゃーっつ 嘘つき」

美優

▽美優 再び 小村の股間に顔を埋める

今度は 美優の口に股間部分があたるように

「ごめん」

小村

▽小村 美優の頭を撫でている

▽美優 小村のジーンズの上から少し固くなった陰茎を 口でパクパク

(ジーンズって、邪魔ね。ちっとも 感触がわかんない)

(やばい、ますます起ってきた)

(わ、反応してる、してる)

(なんとかしないと)

「夢前」

▽美優 (カワイイ) 顔を振り向けて小村の方を見る

「どうしたの 小村君」

▽小村 美優のカワイイ顔を見て、何も言えなくなる

「な、なんでもない」

(美優)

(小村)

(美優)

(小村)

小村

美優

小村

美優

「映画終わるまで、こうしているわ」

(美優)

(折角の男の股間、楽しまなきや)

▽美優 再び顔を小村の股間の上に当てる

(美優)

(さらに固くなってるわ)

(小村)

(や、やばいよ)

▽美優 小村の股間部分を、頬でスリスリ

(小村)

(も、もうだめ)

▽美優 小村の股間が一瞬大きくなったような感覚

直ぐに、臭いに異変を感じる

▽小村 美優の頭を持ち起こす

小村

「ごめん」

美優

「どうしたの」

小村

「急に腹が」

美優

「大丈夫」

小村

「大丈夫、ちょっと待ってて」

▽小村 頭を低くして立ち上がり、狭い通路をゆっくりと歩いて、映画館を出る

○映画館のトイレの個室

小村がジーンズを下ろし、トイレットペーパーで股間を拭いている

小村

「やっぱいな。射精しちゃったよ」

○映画館の中

スプラッターなシーンをポップコーンと食べながら見ている美優

(美優)

(つままない映画ね。それよりも小村君。もしかしていっちゃったの？
あんなに慌てるなんて、カワイイのね)

(数時間後)

□ 第四幕 帰り道

○ (夜) 街を歩く美優と小村

クリスマスのイルミネーションが綺麗だ

「映画、怖いを選んでごめんな」

「ううん。大丈夫。それよりも、小村君 お腹大丈夫？」

(イッタ なんて言えないわよね)

(よかった。ばれてなかった)

「大丈夫。トイレに行ったら治ったよ」

「よかった。じゃ、そろそろ、帰りましょうか」

「そうだね。途中まで送るよ」

「ありがとう。でも、大丈夫よ」

「いいんだ、まだ、一緒に居たいから」

小村

美優

(美優)

(小村)

小村

美優

小村

美優

小村

▽美優、小村 美優の家に向かって歩き出す

○美優の家の近くの公園

「夢前、もう少しだけ、一緒にいたいからあそこで話さない？」

「ええ、いいわよ。私も そう思ってたの」

▽美優、小村 公園の中に入り、ベンチに座る

「あのさ」

▽小村 コートのポケットから小さな箱を取り出し、美優に差し出す

「夢前、これ、クリスマスプレゼント」

▽美優 小村からプレゼントを受けとる

「え？ プレゼント、ありがとう。開けていい？」

「気に入るといいんだけどな」

小村

夢前

小村

小村

美優

小村

▽美優 箱を開ける
イヤリングが入っている。

小村 「本当は、ピアスが、いいんだろうけど、さすがに、穴を空けるのは嫌だったんだ」

美優 「ありがとう。ちょっと付けてみていい」

小村 「うん。俺も、夢前が付けたところ見てみたい」

▽美優 イヤリングを取りだし自分の耳に付ける

美優 「どうかしら？ 似合う？」

小村 「うん、似合ってる」

▽小村 美優の顔を、見つめた

▽美優 小村を見つめる

▽小村 美優の両肩を持つ

(小村)

▽小村 美優の顔に近づけていく

※小村は興奮して勃起状態

▽美優 目を瞑る

(や、やばい、また射精しそうだ)

▽小村 美優のカワイイ顔を間近で見る

(小村)

(あっ)

※射精してしまう

▽小村 美優の肩を持つ手を離す

小村

「だめ。まだ、だめだ」

▽美優 目を開く

美優

「どうしたの」

(美優)

(なに、なんなの、思わせぶり)

小村

「ごめん。やっぱ、俺ら高校生だから」

美優

「うん。わかってる」

(美優)

(え、もう、高校生だよ)

小村

「じゃ、またな」

▽小村 ベンチから立ち上がり、自転車に跨がる

小村

「夢前、今日は楽しかったよ」

美優

「ええ、私も」

(美優)

(いや、中途半端なんですけど)

小村

「メリークリスマス」

▽小村 手を振りながら、自転車を漕ぎ、公園を出ていく

▽美優 ぼっとしながら 小村に手を振る

美優

小村

○公園

ベンチの前で美優が一人で立っている

「なんなのよー」

▽小村 自転車を漕いでいる

「頼むよ、あんなところで、射精しないでくれよ。今日、二回目だけ」

Copyright@2026 DIS

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第九話

夢雄
美侶

サブタイトル 「クリスマス大作戦 松子 & 吉賀 編」

あらすじ

文化祭からラブラブムードの二人

吉賀の家でデートと思いきや、吉賀の先週の話が聞かされて

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□ 第一幕 性なるクリスマス

○ (クリスマスの昼) 吉賀の家

▽ 吉賀 リビングのソファアに座り、雑誌を見ている

吉賀のマンションは、セントラルヒーティングの為、季節に関係なく
温度が一定に保たれている。

その為、吉賀が一人にいるときは、Tシャツと短パンを着ている

(ピンポン)

「誰だろう?」

▽ 吉賀 インターフォンに出る

「はい」

「こんにちは、私よ」

▽ インターフォンのディスプレイに松子の姿が映される

「松子ちゃん、いらっしやい。今、開けるね」

吉賀

吉賀

松子

吉賀

▽吉賀 インターフォンの横の“開鍵”ボタンを押す

(数分後)

▽ドアのチャイムが鳴る

▽吉賀 玄関に行きドアを開ける

ドアを開けると 松子が、少し大きめの箱を持って立っている

「どうしたの？」

「来ちゃった」

「とりあえず、寒いから、早く入って」

「うん、お邪魔します」

▽松子 吉賀の家の中に入っていく

○吉賀家のリビング

吉賀

松子

吉賀

松子

▽松子 コートを脱ぎ、ソファアの背もたれに置く

「急に来るから驚いたよ」

「ごめん、忙しかった？」

「忙しいように見える？」

▽吉賀 Tシャツに、黒のランパン姿だ。

「ぜんぜん見えない」

「今から、オナニーでも しようと思つてたところ？ 手伝ってくれる」

「もう、あいかわらずい冗談がきついんだから

でも、吉賀君なら、いいかな なんてね」

▽松子 大きめの箱を吉賀に差し出す

「ケーキを焼いてきたの。他にクリスマスケーキを買ってるなら、持って帰るわ」

「わあい。松子ちゃんの手作りのケーキ大好き」

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

松子

吉賀

松子

「よかった」

吉賀

「お茶入れるからテレビでも見てて」

松子

「あ、私がケーキを切るわ」

吉賀

「うん、ありがとう」

(数分後)

○吉賀家のリビング

松子と吉賀が ソファーに座りテレビを見ている

テーブルには、松子がつけて来たケーキを食べ終わった皿が載っている

#テレビではクリスマスの映像が流れる#

松子

「世間は、クリスマスなのね」

吉賀

「そうだよ。クリスマスって一番好きな季節なんだ。赤や緑のイルミネーションもいいけど、温かい電球の色も好きなんだな」

松子

「すごい、大人のクリスマスって感じよね」

吉賀

「そうかな？ 松子ちゃんは、いつまで、サンタクロース信じてた？」

松子

「私？ 私は、小学校になったときには何となくわかってたわ」

吉賀

「早いんだね」

松子

「吉賀君は？」

吉賀

「僕も、小学生」

松子

「なあーんだ。いっしょじゃん」

吉賀

「大人に近くなるに従って、物事の仕組みがわかると、夢が減っていくよね」

松子

「そうよね」

吉賀

「赤ちゃんだって、キャベツ畑で、採れるって思ってたもん」

松子

「私は、コウノトリが、運んでくるって信じてたわ」

Copyright@2020 DS

吉賀

「それが、今では、セックスで、子供が出来るなんて、子供が、知ったらシヨックだよね」

松子

「そうそう、わかるわ」

吉賀

「今でも、ココから出る、小さな精子が、人間になるって信じられないよ」

▽吉賀 ランパンの上を指差す

松子

「ははは、そうよね。今年は吉賀君の精子、なん億個も見せてもらったもんね」

吉賀

「ほんとうだ」

松子

「そういえば、何で、今日は黒いの穿してるのね」

吉賀

「そうなの。たまには気分を変えてみるのもいいかなって」

松子

「うん。黒もかっこいいわ」

吉賀

「それに」

松子

「それに？」

▽吉賀 ランパンの裾を捲る

黒いインナーが見える

吉賀

「中も黒いから、透けないんだよね」

松子

「透ける？」

吉賀

「そう。だって、この前」

松子

「この前」

□第二幕 先週の出来事

(# 回想 # 先週の昼)

○(先週の日曜日の昼) 吉賀の家

吉賀は、ソファーに座りテレビを見ていた。
家にいるときは、黒のTシャツに、学校指定の白のランパン

ピンポーン

ドアのチャイムが鳴る

▽吉賀 インターフォンに出る

「はい」

「お荷物です」

「すぐに開けます」

▽吉賀 インターフォンでエレベーターのドアのロックを解除し、玄関へ向かう

▽吉賀 玄関を開ける

吉賀

宅配業者の男

吉賀

宅配業者の男が立っている

二十歳そこそこの長身で、スラリとした細身のイケメン
首には汗拭き用のタオルを巻いている
大きな箱コーラーの入った段ボールを抱えている

宅配男

「どこに置きましょうか」

吉賀

「玄関に置いておいてください」

宅配男

「結構 重いので中まで持って行きましょうか」

吉賀

「いいんですか」

宅配男

「はい」

吉賀

「じゃ、キッチンまでお願いします」

宅配男

「わかりました」

▽吉賀 宅配男を家に入れる、廊下を進む

▽宅配男 玄関で靴を脱ぎ、吉賀の後ろを付いていく

Copyright@2026

宅配男

「立派な家ですね」

吉賀

「そうですね」

宅配男

「ええ、こんな家 なかなか無いですよ」

吉賀

「ありがとうございます」

○（同）キッチン

吉賀

「冷蔵庫の前に置いておいてください」

宅配男

「ここですね」

▽宅配男 段ボールを冷蔵庫の前に置く

宅配男

「コーラ お好きなんですね」

吉賀

「はい。もう、水代わりです」

宅配男

「実は、俺も飲み物の中で、コーラが一番好きなんですよ」

吉賀

「そうなんですね。よかったらコーラ飲んで言って下さい」

宅配男

「いえ、仕事でなんで」

吉賀

「アルコールじゃ無いので大丈夫ですよ」

宅配男

「そうですか。では、いただきます」

▽吉賀 冷蔵庫を開け、冷えたコーラのペットボトルを取り出す

▽吉賀 ペットボトルを宅配男に渡す

▽宅配男 ペットボトルを受け取り、栓を開けて飲む

吉賀

「僕も飲みたくなかったな」

▽吉賀 冷蔵庫を開けて、ペットボトルを取り出す

▽吉賀 ペットボトルの栓を開ける

ペットボトルからコーラが吹き出し 吉賀のTシャツ、ランパンにかかる

吉賀

「わっ。やっちゃた」

▽吉賀 慌ててTシャツを脱ぐ

上半身裸になる

宅配男

「大丈夫ですか」

吉賀

「大丈夫です」

▽宅配男 しゃがみ 吉賀のランパンの上を拭きだす

吉賀

「あ、そこは大丈夫ですから」

▽宅配男 顔を上げ、吉賀の顔を見る

宅配男

「大丈夫じゃないでしょ。濡れてこんなに透けてるよ」

▽宅配男 吉賀のランパンの上から陰茎を握って見せる

ランパンが濡れて陰茎に張り付き、くつきりを形が分かってしまう

吉賀

「そう、そうですね」

宅配男

「ほら ちゃんと拭かないと」

▽宅配男 吉賀の前にしゃがみ、ランパンの上から陰茎を舐め始める

吉賀

「ちよ、ちよっと」

宅配男

「ほら、キレイキレイしようね」

▽宅配男 手を上げ 吉賀の先を高速になで始める

吉賀

「あう、あ、あう」

宅配男

「こんなになっちゃって。君もエロイね」

吉賀

「ち、ちが」

吉賀

「うう」

▽吉賀 腰を振り出す

▽宅配男 顔を上に向けて、吉賀の苦しそうな顔を見る

宅配男

「いいね、その顔。お兄さんに もつと見せて」

▽宅配男 立ち上がり、手を吉賀のランパンの中に入れる

▽宅配男 吉賀に陰茎を握り、ゆっくりと扱く

▽宅配男 下を向き吉賀の我慢している顔を見る

宅配男

「ほら、早く出してくれないと、お兄さん、次の仕事があるんだよ」

▽宅配男 吉賀の陰茎を激しく扱きだす

吉賀

「あう、ああ、あう」

▽吉賀 足がガックとなる

▽宅配男 ランパンから手を出し、ランパンの上から吉賀の陰茎をゆっくりと
扱く

精液で、吉賀のランパンは張り付き、うっすらと色がわかる

宅配男

「こんなに ぐちよぐちよにして、ヤラシイね」

宅配男

▽吉賀 壁にもたれる

「だめだよ。そんな姿で玄関にでちゃ。これから気をつけるんだよ」

▽宅配男 玄関から出て行く

(# 回想 # 終わり)

Copyright@2026 D³S

□第三幕 松子も触発？

○(同)リビング

「なに、それ。それで吉賀君、いっちゃたの」

「うん。そうなんだけど」

「そんなことするなんて。宅配屋さんに文句いってやるわ」

「いいよ。僕が、そんな格好で出たのが悪いんだし」

「それにしても」

「なので、白は止めて、黒いにしてみたんだ」

「そんなことで済むとは、思えないわよ」

「いいんだよ。気持ち良くてイッちゃったんだからしょうがないよ」

「えー 男にされた気持ちよかったの」

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

「そうなんだ。だから 僕も悪いの」

松子

「吉賀君、そんなに気持ちいいことしてほしいの」

吉賀

「まあ、男だったら 誰でもそうじゃないかな」

松子

「じゃ、私がしてあげる」

▽松子 ランパンの上から吉賀の股間を揉み出す

吉賀

「ちよ、ちよっと、松子ちゃん、何するの」

松子

「だって、気持ちいいことしてほしいんですよ」

吉賀

「そ、そうだけど。や、やめて」

▽松子 吉賀の陰茎を扱きだす

松子

「どっ。気持ちいい」

吉賀

「う、うん」

※あまり、気持ちよく思っていない

松子

「なかなか、立たないわね」

▽松子 ランパンの裾から吉賀の陰茎を取りだし、扱く

松子

「ぜんぜん、大きくなってないじゃない」

吉賀

「なんか、調子が悪いのかな」

▽松子 吉賀の陰茎を扱っている

(数時間後)

○(夕方) 吉賀家のマンションの前

松子が帰るので吉賀が見送りしている

「ごめんなさい」

吉賀

「いいよ。僕だって、調子の悪い時だってあるよ」

松子

「吉賀君が、男の人にイカされたって話をするから、私だってって、ムキになって」

吉賀

「ごめん。余りに急だったから。今度は、ちゃんとイクようにするよ」

松子

「ごめんなさい」

吉賀

「大丈夫。なんたって、二回も実績あるんだから」

松子

「そうね」

吉賀

「駅まで送るよ」

松子

「ありがとう」

Copyright@2026 D'S

Copyright@2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

第十話

夢雄
美侶

サブタイトル 「クリスマス大作戦 智美 & 松村 編」

あらすじ

智美が街を歩いていると、かつてのクラスメイト 白井とばったり会って
しまいます。実は、智美、智美、中学時代はいじめられっ子で、白井は
イジメの
中心核。そして 智美にラブホ代をせびってきます。
それを救うのは、偶然 通りかかった 松村
そして、智美は松村を誘い、ラブホに行くのでした

登場人物（本話のみ）

Copyright@2020 D's

□ 第一幕 神聖なるクリスマス

○ (夕方) 商店街 クリスマスの飾りで華やかだ

▽ 智美 商店街を歩いている

智美

「はあ、カップルばかりね。来るんじゃないわ」

女 (幸子)

「あれ？ 智美じゃない？」

▽ 智美 声のする方向を見る

女 (幸子)

「やっぱり、智美じゃん。久しぶり」

▽ 中学の同級生の幸子 (さちこ)

幸子の横には、背の高い男がいた。イケメンではない。どちらかというと、顔が左右非対称で不細工な部類だ。

▽ 智美 嫌な奴に会ったと思う

男

「おい、サッチー 誰だい？」

女（幸子）

「ああ、中学の時のクラスメート。クラスメートって言うけど、だじじゃないわよ。だって、クラス一の嫌われ者だもの。ね、智美そうでしょ」

男

「え、そうなの。道理で、ブスだって、思ったよ」

智美

「じゃ、私は用事があるから」

女（幸子）

「ねえ、待ってよ」

智美

「なに？」

女（幸子）

「昔みたいに、お金貸してくれない？」

智美

「無理よ」

女（幸子）

「友だちが困ってるのよ」

智美

「さっき 友だちじゃないって」

女（幸子）

「そんなん言ったけ」

男

「言ったかな」

女（幸子）

「次あったら返すからさ」

男

「まあ、あうことないだろうけど」

智美

「困ります」

女（幸子）

「何がこまるの？私の方が困ってるのよ。貸してよ。」

「あんたみたいなブスが、何にお金使うのよ」

智美

「え、でも」

男

「こいつとホテルで有意義に使うからさ、俺からも頼むよ」

智美

「本当に、貸せるような お金なんて無いんです」

女（幸子）

「あんたなんか、一生、男とホテルなんか行かないんだから、いいじゃん、貸してよ」

智美

「本当に、ないんですって」

女（幸子）

「じゃ、あそのコンビニで、おろせばいいじゃん。でないと、いいのかなああなたの高校に行って、昔のあなたの事、聞かせてやろうかな？」

智美

「そんなあ」

▽智美 困っている

▽松村 智美の背後に近づく

智美は気がついていない

▽松村 恐ろしい形相で男を睨みつける

▽男 松村の顔を見て震える

「おいセサッチー行くぞ」

「え？ なんで、まだ、お金貰ってないよ」

「いいから、早く」

男

女（幸子）

▽男 去って行く

女（幸子）

「待ってよ」

▽女（幸子） さっっていく

智美

「どうしたのかしら？ 急に？」

▽智美 後ろを振り向く

▽松村 智美にここやかな笑顔

松村

「高谷さん 何してるの」

智美

「松村君じゃない。驚かさないでよ」

松村

「こんな、道の真ん中で立っていると、危ないよ」

智美

「ケーキ 何しようかを考えてたら つい」

松村

「考え事は 道の真ん中でしない方がいいよ」

智美

「そうね。松村君は、ここで、何してたの」

松村

「僕も クリスマスだし、ケーキでも食べようかな？ なんて思って」

智美

「で、ケーキは買ったの？」

松村

「よくよく考えたら、一人なんで、クリスマスケーキなんか買っても無駄だから、止めることにして帰るところだよ」

智美

「一人なの」

松村

「うん。今日も母さんは仕事で忙しいから、僕一人でくりぼっちさ
高谷さん彼氏とデートじゃないの」

智美

「私、そりゃデートに決まってるって言いたいけど、
私もくりぼっちかな」

女

← # インサート # ← 女に言われているところ

「あんたなんか、一生、男とホテルなんか行かないんだから、
いいじゃん、貸してよ」

→ # インサート # →

松村

智美

松村

松村

「どうしたの？」

「松村君、時間あるなら、私に付き合っ

「いいけど、どうしたの」

▽智美 松村の手を引き歩く

○繁華街を抜け、周りに何も無い道

▽智美、松村 道を歩いている

「どこに行くの」

▽智美 黙っている

○ラブホ街

智美と松村が歩いている

○ラブホテルの入口

▽智美 立ち止まる

松村

「どうしたの 高谷さん」

▽智美 ラブホの看板を見る

智美

「松村君、一緒に入る」

松村

「どうしたの」

智美

「どうしても。私とじゃ嫌」

松村

「嫌じゃないけど」

智美

「じゃ、入りましょう。私、したいの」

松村

「わかった いいよ、高谷さん」

智美

「いいの」

松村

「高谷さんの、そんな真剣な目 初めてみたよ」

智美

「ありがとう」

□ 第二幕

○ ラブホの入口

▽ 智美 どうしていいかわからない

「入るんだよね」

「もちろんよ」

▽ 松村 ラブホのドアを開ける

▽ 智美 松村についてラブホに入る

○ ラブホのロビー

ホテルの部屋の内装がわかる写真。パネルが張られている。

「どの部屋にするか、ここで番号を押す方式みたいだね」

「分かってるわよ、どの部屋にしようか見てたの」

「じゃ、早く決めなきゃ。次の人が来てしまうよ」

松村

智美

松村

智美

松村

智美

「コレがいいわ」

▽智美 番号を入力すると、カードキーが出てきたので取る

智美

「さあ、行きましょう」

○ラブホの部屋

▽智美 松村 部屋に入る

▽智美 ベッドに座る

▽松村 智美の横に座る

智美

「ふう、落ち着くわね」

松村

「高谷さんは、よく来てるの」

智美

「よくって、ほどじゃないけど。彼氏とするときは。松村君は」

松村

「僕は、初めてだよ。一度、どんなところか見てみたいと思ってたんだ」

智美

「ふーん」

松村

「案外 高校生同士でも入れるんだね」

智美

「そうね。簡単よ。で、どうする？する？」

松村

「何を」

智美

「男と女が、ホテルに来たら することは一つよ」

松村

「高谷さんが、したいって言うなら、構わないよ」

智美

「いいわよ。じゃ、先にシャワー浴びてきてくれる。私は、その後に浴びるわ」

松村

「うん、わかった」

▽松村 その場で服を脱ぎ、バスタオルを腰に巻いて、シャワールームに入った
シャワーの流れる音が聞こえ出すと、智美は、部屋を物色し始める

(智美)

(コンドームはここね。コンドームを点けるのが、最初の難関ね。

これは、ローション。何に使うのかしら。あ、コレは？ マッサージの機械

どうしよう。本当は、始めてなのに、ウソをついてしまったわ

(数分後)

▽松村 シャワーから出てくる

上半身裸で、腰にタオルを巻いて、別のタオルを髪を拭きながら

「さっぱりした。高谷さんも、早く浴びておいでよ」

「ええ」

▽松村 冷蔵庫を開ける

「わあ、コーヒー牛乳を置いてる。めずらしい。」

▽松村 冷蔵庫からコーヒー牛乳を取り出す

「高谷さんの分もあるから、シャワー浴びたら飲んだら」

「私は、そんな子供の飲みものなんていいわ」

「そっかな、コーヒー牛乳 美味しいのに」

松村

智美

松村

松村

智美

松村

智美

「じゃ、私も シャワーを浴びてくるから、待っててね」

松村

「うん。あ、シャワールームに服を置く場所ないから、ここで脱いでいった方がいいよ」

智美

「いい」

松村

「そう。どうせ、裸になるんだから、何処で脱いでも一緒だよ」

智美

「そうね」

▽智美 少し躊躇してる

▽松村 立ち上がる

「ごめん。明るいと脱げないよね」

▽松村 照明のリモコンを使い、部屋をかなり暗くする

智美

「気が利くじゃない」

▽智美 前にバスタオルを充てて、服を脱ぎ出す

脱ぎ終わると、シャワールームへ入っていった

○ラブホのシャワールーム

▽智美 シャワーを浴びている

(智美)

(どうしよう。こんなことになるなんて。

でも、もう、もどれない。どうにでもなれよ)

(数分後)

○ラブホの部屋

照明を落としているので薄暗いが、見えないことはない明るさ

▽智美 全身にバスタオルを巻いて シャワールームから出てくる

松村

「高谷さんも、どうぞ」

▽松村 智美にコーヒー牛乳を渡し、ベッドの上に座る

▽智美 椅子に座って、コーヒー牛乳を飲む

智美

「おいしい」

松村

「ね。お風呂の後は、コーヒー牛乳だよね」

智美

「とっっても、懐かしい味がするわ」

松村

「僕は、小さい頃、お父さんが好きで、お風呂上がりにいつも飲んでたな」

智美

「そうなんだ」

松村

「で、次は どうするの」

智美

「どうするって」

松村

「こんな ところに来て、何もしないの」

智美

「も、もちろん するわよ」

松村

「じゃ、そんなところに座ってたら できないよ」

智美

「わかってるわよ。急かさないで」

智美

松村

智美

松村

智美

松村

智美

▽智美 立ち上がり、ベッドに座っている松村の横に座る

▽智美 コーヒーを飲みながら、部屋を見回す

「素敵な部屋ね」

「うんうん。わくわくするね」

▽智美 隣の松村の身体を見る

「え、えっと、松村君で、改めてみると、かっこいいよね」

「ありがとう」

「ちょっと、触ってもいい？」

「いいよ」

▽智美 松村の厚い胸に手を当てる

「固いのね」

Copyright © 2026 D'S

松村

「そっだね」

智美

「お腹も触っていい？」

松村

▽松村 後ろに手をついて、身体を斜めうしろに傾け、腹筋部分を智美に見せる
「どうぞ」

▽智美 松村の腹筋と触る

智美

「夏休み、みんなで海に行ったときに、松村君にローションを塗ったの思い出すわ」

松村

「そうそう。あの時の高谷さんの手の柔らかい感触、今でも覚えてるよ」

智美

「そっなの」

松村

「そのあと、高谷さんがローションをこぼして 僕のこころがビショビショになっただよだね」

▽松村 バスタオルの上から自分の股間を指差す

智美

「そうそう。私、ビックリして」

松村

「僕も、高谷さんに、競パンの上から触られてビックリしたよ」

智美

「そんなこと 合ったわね」

松村

「今日は、慌てなくていいからね」

▽智美 松村の腹筋を触っていた手を下げ、タオルの上から松村の陰茎をさわる

▽智美 松村の陰険を優しく揉む

(智美)

(男の人のをちゃんと触るの始めて。タオルの上からでも、堅さと温かさがわかるわ)

智美

「固くなってる」

松村

「そりゃ、高谷さんが前にいるんだもん。しょうがないよ」

智美

「男の人って不思議。どうして、大きくなるのかしら？」

松村

「ここにはね、海綿体ってのがあって、刺激を与えると、血液がたまり固くなるんだよ」

智美

「科学的な説明をありがとう。射精すると どうして精子が出るのかしら？」

松村

「さあ？ それは、神様のイタズラじゃない？」

智美

「急に、神頼みなのね？」

松村

「もっと触っていいよ」

智美

「ええ」

松村

「タオルの上からだど、わからないでしょ」

(智美)

(え、直接さわるの。大丈夫かしら)

▽松村 タオルの上の智美の手を掴み、タオルの中に入れる

▽智美 松村の毛の感触が指に伝わる

「どっ」

松村

▽智美 松村の陰茎を直に握る

「

智美

智美

松村

智美

▽松村 智美の顔を じっと見る

▽松村 目をつぶり 顔を近づける

▽智美 目を瞑る

▽松村 智美にキスをする キスをしながら、智美の全身を巻いている
バスタオルに掴み、バスタオルを取ろうとする

▽智美 急に立ち上がる

「待って、やっぱりダメ」

「ごめんなさい、やっぱり できないわ」

「どうしたの」

「ごめんなさい、私、ウソをついてたの。セックス、
いえ、男の人の体だって、この前、海で松村君を触ったのが初めてなの。
だけど、はずかしくて、みんなの前で、いいかつこ付けてただけなの。
中学校の時は、みんなに虐められていて、ブスで、バカで、クラスの

嫌われ者だったの」

松村 「高谷さんは、決して、ブスじゃないよ。頭もいいし、クラスみんなは尊敬してるよ」

智美

「慰めてくれて、ありがとう。」

松村君にも、悪いことしてたわ。最初は、根暗で気味が悪いなんて、思ってたりしたんだもんね。

根暗で気味が悪かったのは、私なのにね。

美優や、松子にバカにされないように、ネットでは、いっぱい調べて知識はあったんだけど、あの時は、本当は怖かったの」

松村

「無理することはないよ。高谷さんは、高谷さんらしく してればいいよ」

智美

「ああ、なんか、話したらスッキリした。明日、学校に行ったら、美優と松子に 正直に話すわ」

松村

「それは、必要ないんじゃないかな」

智美

「どうして？」

松村

「夢前さん、中川さんは、そんなこと聞いても聞かなくても、

これまでの友情は変わる事ないと思うよ」

智美 「そうね。二人は、私がいままでいた 友だちで最高の友だちだって
言えるもの」

松村 「うん。あの二人なら大丈夫」

智美 「中学校で虐められていた事がばらないようにと、同級生が誰も志望しない
からってだけで、この学校を選んだの。でも、この高校を選んで本当によかった」

松村 「僕だって同じさ。高谷さんたちに、出会えて 本当に良かったよ」

智美 「なんか、今日の松村君、いつもと違って カッコいいわ」

松村 「それって、いつもは、カッコ悪いみたいなんだけど」

智美 「ふふふ。だって、学校の時の松村くんて、陰キヤなんだもの」

松村 「陰キヤか。でも、それも悪くないかな。
だって、人に気にされずに 自由に生きていけるって、最高じゃない」

(数分後)

○（夜）繁華街の道

▽智美 松村 が歩いている

「私から誘っておいて」「めんなさい」

「なんのこと」

「本当は、したかったんでしょ」

「いや、一度い、ラブホっての中を見たいと思ってたから、見れてよかったよ」

▽智美 クツスと笑う

「松村君たら」

（ひと呼吸）

「私決めた。最初に するのは、松村君って」

「え、僕」

智美

松村

智美

松村

智美

智美

松村

智美

「そうよ。嫌」

松村

「僕なんかでいいの」

智美

「もちろんよ」

松村

「わかった。じゃ、僕も、初めては高谷さんとする。でも、下手くそって怒らないでよ」

智美

「それは、私の方よ」

松村

「そんなことないよ」

智美

「私、気持ちの整理ができたら、もう一回、松村君を誘うわ。それまで、待っていてね」

松村

「うん。わかった。でも、無理をしちゃだめだよ」

智美

「がんばるわ。それにしても、やっぱり、今日の松村君って、かっこいいわ。それに、ラブホって、本当にはじめてなの。なんか、知ってるみたいだったし」

松村

「そうだよね。そう思うよね」

▽智美 少し 悲しそうな顔

智美

「松村君って、実は、裏ではプレイボーイなの」

松村

「プレイボーイって。じゃ、正直に話すけど、みんなには黙っておいてくれる」

智美

「もちろんよ」

松村

「じつは、亡くなった父が、いくつものラブホを経営していたんだ」

智美

「え、ラブホって会社なの」

松村

「そうだよ。普通のホテルと一緒に、どこか会社がやってるんだよ」

智美

「そうなんだ」

松村

「おかげで、僕は小さいころから、ラブホ、ラブホって、虐められていたんだ」

智美

「そっか、松村君にも そんな過去があるのね」

松村

「だから、高谷さんの気持ちが判るのかもしれないね」

智美

「そっか」

松村

「だからって、父を一度も恨んだことはないよ。むしろ尊敬してるし」

智美

「立派なお父さんだから、松村君も立派なのね」

松村

「そんなことないよ」

○商店街の中

(雪が降っている)

▽智美 手の平をあげる

手の平に雪が落ちる

「あら、いつの間にか雪だわ」

「どつりで、寒かったはずだよ」

「クリスマスに降る雪って、ロマンチックだね」

智美

松村

智美

松村

「そうだね。そして、直ぐに消える。儂いよね」

智美

「今日は、素敵なクリスマスだったわ」

松村

「僕も 楽しかったよ」

智美

「松村君から、最高のクリスマスプレゼントもらったしね」

松村

「そんなの 上げたっけ？」

▽智美 唇に指を当てて

「ここによ」

▽智美 松村の両手を握る

▽智美 松村 空を見上げながら、ゆっくりと回る

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

おわり

※この後は、スペシャル編に続きます。乞うご期待